

梅 光 学 院 大 学

論 集

第57号

志賀直哉「城の崎にて」における〈運命〉と〈偶然〉 ——英語教科書としてのマコーレー著 <i>Lord Clive</i> 引用の意味——	入 江 香都子 [1]
藤井懶斎と中村惕斎の啓蒙教化をめぐる試論 ——女性教訓への取組を中心に——	董 航 [13]
若者の地元就職意向に関する一考察	宋 弘 揚 [25]
サービス・ラーニングにおける地域パートナーとの 関係構築の可視化に関する研究	馬 場 洸 志 [37]
梅光型PBLが受講学生に及ぼす効果 ——教員へのインタビュー調査から——	真 田 穰 人 赤 堀 方 哉 [53]

志賀直哉「城の崎にて」における〈運命〉と〈偶然〉

—— 英語教科書としてのマコーレー著 *Lord Clive* 引用の意味 ——

入 江 香 都 子

要 旨

志賀直哉の作品「城の崎にて」一九一七（大正六）年は、その無駄のない文体が多くの評者によって賞賛されてきた。また、戦後、高等学校の国語教科書の教材に採択されたこともあり、今日でも広く人口に膾炙しており、研究も多い。

ただ、作品の冒頭近く、列車事故に遭った語り手が九死に一生を得て助かったことと対比する形で出てくるロード・クライヴのエピソードの意味については、これまでほとんど注目されてこなかった。しかし、この引用には、ほんの数行でありながら当時の読者には喚起させる多くの情報が詰まっており、そうした時代のコンテクストを明らかにすることにより、作品「城の崎にて」の新たな読みの可能性が見いだせるのではないだろうか。

本稿では、まず「城の崎にて」発表当時の時代背景に遡り、英語教科書の教材として *Lord Clive* が採用されていた意味を考察する。次に、「城の崎にて」のテキストの構造や草稿からの改稿過程の分析を通して、「私」の心境の流れを読み解いていく。

これらの考察を通して、ロード・クライヴのエピソードが単なる導入的付属物ではなく、無駄のない「城の崎にて」の文体及びテキストの構造の一部として重要な意味を持って組み込まれており、この作品が当時のコンテクストにおいて時代的な批評性を秘めていたことを明らかにする。

キーワード：生と死／ロード・クライヴ／ホイッグ史観／英語教科書の歴史／動と静

序

志賀直哉の小説「城の崎にて」⁽¹⁾ は、これまでの研究において、文体面では谷崎潤一郎の『文章読本』の言に代表されるように⁽²⁾、主にその無駄のない文章の美しさが、また内容面では生と死の凝視、志賀自身の死生観といった側面から評価され、数多くの論文が書かれてきた。また、作品が国語教科書に採用されていることから、上記の観点から教材として論究するものも少なく

ない。ところが一方で、その語り手、「自分」の死生観と密接な関係を持つにも関わらず、作品の冒頭近く、列車事故に遭った語り手の「自分」が九死に一生を得て助かったことと対比する形で出てくるロード・クライヴのエピソードの意味も、語り手の個人的な生死レベルでの範囲内で解釈されてきた傾向があり、この「ロード・クライヴ」の重要性について、焦点化して深く掘り下げた論は見当たらない。

「ロード・クライヴ」からの引用は作品において、語り手の「自分」に、生と死の問題を考えるきっかけを提供している。しかし、これまでの論では、その対比した結果にだけ注目している傾向がある。危機的な状況から生き延びたことへの「自分」の解釈と、ロード・クライヴのそれとは、似ているようでいて実は著しく対立することを見逃してはならない。「城の崎にて」の「自分」は生と死の別を〈偶然〉の産物だと考えるに至るが、ロード・クライヴは必然、すなわち「何かが自分を殺さなかつた」という〈運命〉的な考えを抱いたのである。突き詰めれば、「城の崎にて」には二つの死生観が対比されており、その一方がロード・クライヴのもの、もう一方が語り手「自分」のものであることから、「ロード・クライヴ」が作品内で持つ意味は思いのほか大きいのである。

この対比から、西洋と東洋という対比を考えることは容易である。しかし、作者志賀直哉は東洋的境地を表現し、西洋的な発想から離れたのだとの解釈に還元するのは、不十分ではないだろうか。というのも、「ロード・クライヴ」は単に西洋を表しているのではなく、この作品執筆当時の日本においては別の重要な意味を持っていたからである。

今日の目からみれば、「城の崎にて」冒頭の「ロード・クライヴ」の引用は、一見、語り手である「自分」の心情を導き出すための、ほんの付属的な導入に見えるかもしれないが⁽³⁾、しかし、ここでいう「ロード・クライヴ」とは当時志賀にとっては、あるいは当時の読者にとっては英語教科書の教材であったということに注目したい。また同時に、当時のイギリスの有名な歴史学者であるT.B.マコーレーによる著作でもあった。そのことを踏まえていくことにより、この引用には、ほんの数行でありながら今日の読者とは違い、当時の読者に喚起させる情報が詰まっていたことに気づく。そうした時代のコンテキストを復元させることにより、作品の新たな読みの可能性が見いだせるのではないかと考える。これまでの研究において「城の崎にて」は、多く志賀の個人レベルでの死生観に焦点を当てて読まれてきた傾向にあるが、この作品は、個人の死生観という枠内のみにおさまるものではない。また志賀の作品でよく指摘されている汎神論的世界観や東洋的寂寞といったものとも違うテーマを孕んでおり、そこに同時代性を連関させていることにこそ意味があると思うのだ。

本稿では、志賀直哉が「城の崎にて」にロード・クライヴのことを導入したことの意図を証明し、その心境の変化を考察することを目的とする。これまで「ロード・クライヴ」と「自分」という対比には注目しても、「ロード・クライヴ」がどういう文脈で使われていたのかということや、

時代的意味には注目されず、この数行に隠された深い意味が考察されてこなかった。ここに注目することで、違う意味が見えてくると考える。

そのために、まず「城の崎にて」発表当時の時代背景に遡り、英語教科書の教材として「ロード・クライヴ」が採用されていた時代的な意味を考察し、志賀が「ロード・クライヴ」を作品内に引用することによって読者に想起させようとした事柄や背景のコンテキストを浮かびあがらせる。次に、テキストの構造や草稿からの改稿過程の分析に移り、蜂、鼠、蟻のエピソードから語り手が生と死の問題をロード・クライヴの感じた〈運命〉的なものとは対比的に、〈偶然〉のものだと考えるに至った心境の流れを、特に蟻の場面の執筆過程を中心に読み解いていく。

これらの考察を通して、ロード・クライヴのエピソードが単なる導入的付属物ではなく、無駄のないと評される「城の崎にて」の文体及びテキストの構造の一部として重要な意味を持って組み込まれており、この作品が当時のコンテキストにおいて時代的な批評性を秘めていたことを明らかにする。

一、マコーレー著 *Lord Clive* 引用の意味

まず、作品冒頭近く、山手線で電車にはねられ、その後養生にと城崎温泉を一人訪れた語り手「自分」が、列車事故から九死に一生を得たことに対する感慨を述べた箇所に注目したい。

自分は死ぬ筈だったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、——中学で習ったロード・クライヴといふ本に、クライヴがさう思ふ事によつて激励される事が書いてあつた。実は自分もさういふ風に危ふかつた出来事を感じたかつた。そんな気もした。然し妙に自分の心は静まつて了つた。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起つてゐた。 「城の崎にて」

先にも述べたように、これまでこの部分におけるロード・クライヴの役割は、語り手の「自分」が「死に対する親しみ」を感じるようになったことを導くための単なる対比的な導入部とのみ考えられてきた。そのため、ロード・クライヴが引用された事自体の意味を主眼に、深く考察した論は見当たらない。しかしここには、従来見落とされがちだった重要な意味が内包されている。そのことを明らかにするために、ロード・クライヴが何者なのかを先に確認しておこう。

ロード・クライヴは、イギリスのインドにおける覇権を確立したブラッシーの戦い大勝の立役者であることから、明治中期から大正期の日本で、イギリスの英雄として紹介されていた。当時イギリスは世界の帝国であり、日本の近代化の到達目標であった。志賀の中学時代にあたる一八九五（明治二十八）～一九〇三（明治三十六）年の日本は、まさにその近代化のまっただ中の時

期にあたり、一八九四（明治二十七年）年日清戦争、一九〇四（明治三十七）年日露戦争の二つの戦争に勝利し、列強の仲間入りをするに至る渦中であった。

一市民が戦争で国のために働き、勲功としてLordの称号を受けるクライヴのサクセスストーリーはまさに当時の日本の国家政策に合致していたのである。そうした状況の中で、イギリスの歴史学者マコーレーによって書かれたクライヴの伝記である*Lord Clive*という書は、学習院などの中学校や旧制高等学校等で英語の教科書に採用され、広く知られていた。

例えば、日本の英語教育史を専門とする高梨健吉氏が、明治期の英語教科書について、マコーレーによる著作を二つ並べ、*Lord Clive*は「英語の上級クラスでは『ヘスチングス伝』とともに広く読まれた」と指摘している⁽⁴⁾。また一八九〇（明治二十三年）年に、マコーレーの著書『われんへいすちんぐでん瓦連兵須珍虞斯伝』を訳した渡辺松茂は「クライヴの実伝を読む者、またヘスチングスの実伝を知らんとするは実に人情の然らしむる所なり。且つ方今本邦公私立英学校の教科書中二氏の実伝を備へざるもの殆ど之れなし」と書いている⁽⁵⁾。これらのことからわかるように、*Lord Clive*は当時日本で盛んに採用されていた有名な英語教科書だったのである。

実際、志賀が通った当時の学習院について書かれた『学習院一覧』（明治三十四―三十五年）の「中等学科各級教科用書籍一覧表」における、英文課の教科書は「マコーレー クライヴ伝」と記されており、志賀が五年級であった一九〇一（明治三十四）年には、確かに*Lord Clive*を教科書として読んでいたことが確認されるのである⁽⁶⁾。また、学習院以外に、旧制高等学校でもこの本は英語教科書に採用されていた。例えば、芥川龍之介は一九一〇（明治四十三年）年に、第一高等学校入学直後の授業の内容を「木曜日から授業有之、一週独語九時間英語七時間と云ふひどいめにあひ居候 教科書はマカウレイのクライヴ カーライルのヒーロー ウォーシップ及ホーソーンの十二夜物語の抜粋に御座候」⁽⁷⁾と、手紙で友人に伝えている。さらに、『旧制高等学校全書』をみれば、実際、第一高等学校に限らず、第三高等学校、第六高等学校でも、*Lord Clive*を教科書として採用していたことが記され、他にも明治十九年から大正初期までは、各地の旧制高等学校及びその前身の旧制高等中学校で*Lord Clive*をはじめとするマコーレーの著作は盛んに英語教科書として使用されていたことがわかるのだ⁽⁸⁾。

このように、マコーレーの著作が英語教科書として盛んに用いられていた事実を示すエピソードの一つとして、一九二四（大正十三年）年、芥川龍之介が編集し興文社から刊行された英語教科書*THE MODERN SERIES OF ENGLISH LITERATURE*（全八巻）の「序」は興味深い。芥川はその序文冒頭から「学生は新を愛するものである。新を愛する学生にMacaulayやHuxleyを読めと云ふのは残酷と評しても差支へない」⁽⁹⁾と述べており、こうした記述からも、いかに当時の学生たちが定番の英語教科書として、マコーレーの著作を日常的に読んでいたのかうかがえるだろう。

そして、先に示した「城の崎にて」冒頭のロード・クライヴ引用の部分は、*Lord Clive*の中で、

クライヴが二度にわたってピストル自殺を企てたものの、そのどちらも、ピストルの装填に問題がないのに発砲しなかったという以下の場面と呼応する。

Twice, while residing in the Writers' Buildings, he attempted to destroy himself; and twice the pistol which he snapped at his own head failed to go off. This circumstance, it is said, affected him as a similar escape affected Wallenstein. After satisfying himself that the pistol was really well loaded, he burst forth into an exclamation that surely he was reserved for something great.

LORD CLIVE

(書記官の官舎に住んでいた頃、彼は二度自殺しようとしたが、自らの頭に撃ったピストルはどうしたとか、二度とも不発だった。この状況は、かのワレンシュタインが死を決意して死ねなかった時のように、彼のその後に影響を与えたといわれている。ピストルの装填に問題がなかったことを確かめ満足し、彼は突然、自分が必ずや何か偉大なことをなすよう運命付けられているのだと確信し、感嘆の叫び声をあげた)⁽¹⁰⁾

最後の surely he was reserved for something great は、直訳すると「自分が必ずや何か偉大なことを成すよう運命付けられているのだと確信した」と訳せるが、志賀が「城の崎にて」でこの場面を「何かが自分を殺さなかった、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ」と書いていることから推測すると、英語の原本だけでなく当時 *Lord Clive* の最初の翻訳本として出まわっていた末広鉄腸の『印度政略史』で、「天ノ我ヲ殺サル者ハ偶然ニ非ズ必ラズ我ヲシテ一大事業ヲ成サシメント欲スルナリト」という訳文も参照していた可能性が高いと考えられる⁽¹¹⁾。さらにこの箇所は、先に挙げた高梨氏の『英語教科書の歴史と解題』によれば、英語教科書としてよく読まれた *Lord Clive* の中でも、特に「有名なエピソード」として指摘されている⁽¹²⁾。つまり、志賀が「城の崎にて」で引用したロード・クライヴのエピソードは、当時広く中学校や旧制高等学校の上級向け英語教科書として使われていた *Lord Clive* の中でも、最も有名な箇所だったのである⁽¹³⁾。

クライヴはこのエピソードの後、自ら志望して書記官から軍籍に移り、軍人としての頭角を現していく、そして後にイギリスの印度覇権の礎となったブラッシーの戦いで勝利するのである。これに当時の日本の社会背景を加味すると、「ロード・クライヴ」がクライヴの伝記という以上に、この教科書が開国から明治期の日本に影響を与えたイギリスの歴史家 T.B. マコーレーによる *Lord Clive* であることが重要な意味を持ってくることを見逃してはならない。マコーレーはそのホイッグ史観とともに広く日本に知られ、近代化を急ぐ人々に多大な影響を与えていたのだ。

ホイッグ史観 (Whiggish historiography) の基本となる考え方は、相互に排他的な対局概念によって歴史を裁断し、一方が他方を克服し、その成功や繁栄を歴史的必然、絶対的な運命に導か

れるものと捉えて勝利者を正当とする歴史観であり、マコーレーはこのホイッグ史観を代表する歴史家である。その著作 *Lord Clive* は、一八四〇年にホイッグ党の立場を明らかにしたイギリスの評論雑誌 *Edinburgh Review* 誌に発表、明治十年代には日本における英語教科書として流行し、翻刻版や注釈、訳本まで出ている。また、一八八五（明治十八）年に和訳本も出版された。実際、先に引用したロード・クライヴの自殺未遂の場面も生と死を対局概念として捉え、死なずに生き残った自分の生を、必然や運命として捉えるホイッグ史観に基づいていることがわかる。このマコーレーのホイッグ史観には、日本では民友社の徳富蘇峰や明治期から昭和にかけて活躍した歴史家・竹越与三郎をはじめ多くの人々が影響を受けており、その歴史観が日本の近代化に多大な影響を与えたことが、イギリス近代史を専門とする今井宏氏の『明治日本とイギリス革命』でも考察されている⁽¹⁴⁾。

日本文学者の石原千秋氏が『国語教科書の中の「日本」』⁽¹⁵⁾で、教科書が国策を反映しやすいものであることを述べているように、当時、学習院や旧制高等学校で盛んに英語教科書に採択されていたマコーレーの *Lord Clive* は、こうした時代のコンテキストに照らし出してみると、まさに当時の日本の国策の一環を担っていたことがわかるのだ。事実、一八九〇（明治二十三）年に刊行された『学習院教育要領』には、語学教科書の選択の基準として次のように記されている。

語学教科書にハ専ら古今名士の嘉言善行を録し或ハ歴史中著名なる事蹟等を載せるを以て（欧米諸国の如き多くは国民的読本なる者ありて一に学生の愛国心を涵養せしむるを以て目的とす⁽¹⁶⁾

つまり、*Lord Clive* は愛国心を涵養するための、近代化の英雄、植民地主義の英雄の伝記という意義がこめられており、そのことは志賀も当時の小説読者もわかるという共通認識があったのである。

以上の時代背景を考慮して「城の崎にて」を読まなければ、なぜ作中にロード・クライヴが出てきたのか、十分には理解することはできない⁽¹⁷⁾。そこに作品「城の崎にて」完成に至った時の、時代の国家主義的な歴史観、死生観に対する志賀の批評精神を読み取ることができるのではないだろうか。そのことが、生と死の問題を扱った「城の崎にて」にも、個人的な死生観の枠を越えて反響しているのである。

二、「生と死」、「動と静」の二項対立をこえて

ただし、志賀は意識的に、思想的に、ロード・クライヴに反発したというのではない。彼は特に反植民地主義者だったわけではなく、むしろ、最初ではできればロード・クライヴのように「感

じたかった」と思いつつ、自身の感性に忠実であった結果、それができなかったのである。言い換えれば、彼は自身の身体感覚にもとづいて、ロード・クライヴとは正反対の発想に最終的に至ったといえる。その気持ちの流れが、テキストの表現にはよく表れている。

ここから、「城の崎にて」のテキストの具体的な分析に入っていこう。既に多くの論者によって指摘されているように、テキストには、語り手である「自分」の気持ちを表現する言葉として、繰り返し「淋しい」「静か」という表現が出てくる。城の崎に到着してすぐの、「自分」の境地が語られる部分でも、「考へる事は矢張り沈んだ事が多かつた。淋しい考だつた」と、「沈んだ事」「淋しい考」、すなわち自分の死について考えている。それは「静ないいい気持」であり、「淋しいがそれ程に自分を恐怖させない考」という。この後、作品中には、蜂、鼠、蟻の順で生き物の生死を巡るエピソードが出てくるが、それぞれの場面との遭遇を通して「自分」の考える生と死への思いが徐々に深まり、変化していくことになる。

まず最初に出てくる蜂の場面では、「生きている蜂」と「死んでいる蜂」の違いが、「忙しさに働いてゐた」「少し歩きまはる奴もある」「羽根を両方へしつかりと張つてぶーんと飛び立」ちというように「如何にも生きてゐる物といふ感じ」を表す〈動〉と、「一つ所に全く動かずに俯向きに転つてゐる」「それは三日程その儘になつてゐた」「凝然としてゐる事だらう」という「如何にも死んだものといふ感じ」を表す〈静〉の対比によって描写されている。そして、その上で死んだ蜂と、墓に横たわる死後の「自分」の姿をその「淋し」さや「静」かさと重ね合わせているのである。

蜂の次には、鼠の災難の場面に遭遇する。ここでは頭から首に魚串を刺され川に投げ込まれた鼠に、子供や車夫が石を投げており、一方の鼠がなんとか川から這い上がって助かろうともがき苦しむ姿が描かれている。このなんとか助かろうとする鼠と、列車事故に遭った後に、なんとか助かろうと「できるだけのことをしようとした」語り手自身の姿とを重ね合わせ、「それは鼠の場合と、さう変らないものだつたに相違ない」と述懐しているのである。ここでも蜂の場面と同様に、「自分が希つてゐる静かさの前に、ああいふ苦しみのある事は恐ろしい事だ。死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいふ動騷は恐ろしいと思つた」と、「死後」＝「静（かで）寂（しい）」／「死に到達するまで」＝「動（き）騷（ぐ）」というように、生と死をやはり〈動〉と〈静〉の二項対立として描こうとしていることに気づく。これまでの研究においては、「静か」さや「寂し」さに重点が置かれてきた傾向があるが、〈静〉は単独ではなく、あくまでも〈静〉と〈動〉との関係において書かれていることこそが重要なのである。さらにここで興味深いのは、生と死、〈動〉と〈静〉の境界を決定付けるのに、魚串をねずみに刺したり、鼠が川から這い上がるのをじゃましようと子どもや車夫が石を投げるといった他者の悪意つまり、他者の意思が関わっていて、語り手がそれを「死ぬと極まつた運命」と、運命と感じていることである。

ところが、最後の蟪蛄の場面にいたって、蜂と鼠の場面で感じられていた生と死を分かち二項対立の図式は大きく変化する。

未だ濡れてゐて、それはいい色をしてゐた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、凝然としてゐた。(……) 自分は蟪蛄を驚かして水へ入れようと思つた。不器用にからだを振りながら歩く形が想はれた。自分は蹠んだまま、傍の小鞠程の石を取上げ、それを投げてやつた。自分は別に蟪蛄を狙はなかつた。狙つても逆も当らない程、狙つて投げる事の下手な自分はそれが当る事などは全く考へなかつた。石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蟪蛄は四寸程横へ跳んだやうに見えた。蟪蛄は尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見てゐた。最初石が当つたとは思はなかつた。蟪蛄の反らした尾が自然に静かに下りて来た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついてゐた両の前足の指が内へまくれ込むと、蟪蛄は力なく前へのめつて了つた。尾は全く石についた。もう動かない。蟪蛄は死んで了つた。

「城の崎にて」

この蟪蛄と遭遇した場面の表現で特徴的なのは、まず第一にそれまでの蜂や鼠の場面では、生と死が〈動〉と〈静〉の二項対立で書かれていたのに対し、それだけでは語りきれなくなっていることである。蜂や鼠の時とは違い、二項対立の境界は曖昧になっているのである。例えば、蟪蛄は「濡れてゐて、それはいい色をして」如何にも生きているもののようであるが「凝然としてゐる。つまり生きているが〈静〉かで〈動かない〉ものとして描かれている。また、蟪蛄と遭遇する直前に描かれている桑の葉の描写も、まるでこれから起こることに対する導入であるかのように、同様の意味を持っていることも見逃してはならない。「総て静寂の中」に風もないのに「忙しく動」き、風が吹くと「動く葉は動かなくなつた」と、〈動〉と〈静〉の二項対立の図式には納まりきれない現象が示唆されている⁽¹⁸⁾。

そして第二に、その蟪蛄の生と死の境界を分つことになった「自分」の投石が、子どもや車夫が鼠に投石していた時と対照的に、蟪蛄の死を意図した行為ではなかつたこと、言い換えれば、蟪蛄の死は鼠の場合と異なり、他者の意図とは無関係に起こった出来事として描かれているのだ。このことは重要である。語り手が「蟪蛄は好きでも嫌ひでもない」と好悪の別を離れ、「自分は別に蟪蛄を狙はなかつた」というように、他者である語り手「自分」の意図とは全く無関係に、蟪蛄は〈偶然〉石に当たって死んでしまうのである。そして、それは誤って「其気が全くないのに殺して了つた」〈偶然〉の死であり、蟪蛄にとっては「不意な死」であると、蟪蛄の死が石を投げた自分の意図とは無関係なものだということが示されるのだ。その〈偶然〉の死を「蟪蛄の身になつて其心を感じた」と、自分と重ね合わせているのである。これはちょうど列車事故の瞬間の自分と、蟪蛄に石が当たった瞬間を重ね合わせているということと呼応する。その上で、「自

分は偶然に死ななかつた。蟻蛭は偶然に死んだ」と続け、生死を決定するのは必ずしも他者の意思にはよらない偶然のものであり、二項対立の両極にあるものではないという心境に至っている。つまり、蟻蛭も語り手の「自分」も、偶然生き残りもし、死にもする生き物だという境地で、「生き物の淋しさを一緒に感じ」ているのである⁽¹⁹⁾。

ここに至って、「自分」が事故から死なずに生き残ったことが「ロード・クライヴ」に描かれているような、生と死を対極に置き運命に導かれて生き残った〈運命〉的な必然ではないことが示唆され、「偶然に死ななかつた」自身のことに帰結することになる。そうして、「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした」という心境に至っていくのである。

以上、城の崎滞在中に遭遇した、蜂、鼠、蟻蛭のエピソードを通して、まず死後に墓の下に横たわる「自分」、事故の後に助かろうとあれこれ努力した「自分」、そして事故の瞬間の「自分」へと順々に自身の心境や身体感覚を遡っていき、生き残った「自分」の生に対して、「ロード・クライヴ」が自らの生を死と対極に置いて感じた〈運命〉とは違い、生と死の境界が、他の生き物と同様に「偶然」のものだという境地に至るのである。

三、運命と偶然

もっとも、こうした身体感覚に忠実になるには努力があった。志賀は事故で九死に一生を得た後、「城の崎にて」の草稿となる「いのち」⁽²⁰⁾を書いたが、そこではまだ彼の生と死についての考えは彼の感じていたことを忠実に表現できていなかった。その証拠に、最後に生の偶然性を感じるに至る蟻蛭の場면을、草稿では書きかけながら途中で挫折している。それが数年を経て考えが成熟してきて、ようやく三年後に「城の崎にて」となったのである。そのプロセスは、彼がロード・クライヴを真に脱するプロセスでもあったといえるだろう。最後にこの草稿からの改稿過程をみることで、これまでの考察を補強したい。

右に述べたように、蟻蛭のエピソードについては、草稿では蟻蛭の場面を書き始めたところで中断しており、誤って蟻蛭を殺した場面は書かれていない。また同時に「ロード・クライヴ」のエピソードも、実は「城の崎にて」完成に至って初めて登場するのである。草稿の段階ではこのクライヴのエピソードに当たる生と死を〈運命〉によって捉える部分は、別の二つのエピソードを通して丁寧に語られている。

一つ目は、「自分」と同じように鉄道事故に遭い九死に一生を得た男児の幸運を文章にした、まさにその夜に自身が鉄道事故に遭ったこと、二つ目は、ある老人が八十何歳かになった祝いをした二三日後に電車で轢かれそうになり、惰性で停車した電車の前の網に足首が当たった事で転倒して死んでしまったというものである。子どもの命拾いでは、「自分が子どもの助かったこと

を書いて置いたが故に自分も助かったやうに思はれてならなかつた」と述べ、老人の事故死のエピソードには「自分の出会った危険に引き比べて、不思議な心持がした」と、「自分」が死ななかつたことに対して、生と死を対極に置いて生き残った自分に運命的な力を感じていることが書かれているのである。

注目したいのは、その後小説「城の崎にて」を書き上げるに至って、これら草稿の運命的なエピソードは全て削除され、前にも示したロード・クライヴの引用に簡潔に置き換えられていることである。しかも、草稿では「自分」が助かったことがいかに「幸運」なことであったかを事故の経緯とともに詳細に述べ、「自分の怪我は最小限で済んだ。自分は後になつて其時の恐しさをシミペ／＼感じた。而して自分の幸運を感謝した」と運命的なものを感じているのに対し、「城の崎にて」では事故の委細や感慨は削除した上で、冒頭のロード・クライヴの引用の場面において、「実は自分もさういふ風に危ふかつた出来事を感じたかつた。そんな気もした。然し（…）」と、意味を反転させているのである。さらにこうした心境の変化は、作品の最後の蠅螈の場面で、生の偶然性に思い至る部分でも繰り返されている。

そして死ななかつた自分は今こうして歩いてゐる。さう思つた。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬやうな気もした。然し実際喜びの感じは沸き上つては来なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした。

「城の崎にて」

生と死を対極に置き、何かの意図、意思による運命によって死ななかつたとするロード・クライヴと同じように、生き残った自分の生を〈運命〉によって描こうとしたことから始まりながら、最終的には〈運命〉から離れて、生と死というのは必ずしも何かの意図によって確然と分かたれるものではない〈偶然〉である、という心境に至っているのである。

以上、考察してきたように、当初志賀は、草稿の段階では生と死を運命的なものとして書こうとしながら書ききれず、小説「城の崎にて」に至って、その運命的な生を「ロード・クライヴ」の一文に置き換え、最終的にはそこから対照的な境地に至った「自分」の心境を書き上げている。しかし、草稿で書かれた二つの運命的なエピソードを「ロード・クライヴ」に集約させたことにより、それは単なる生の必然と偶然の問題にとどまらない別の意味を担わされることになったのだ。本稿の最初に述べた、当時の英語教科書としての「ロード・クライヴ」が持っていた意味を踏まえた時、そこに描かれる、運命的な生と対照的に生の偶然性を最終的に見いだしていく「城の崎にて」という小説の構造は、新たな意味を付与されることとなった。すなわち、歴史を排他的、対立的概念によって裁断し、勝利者は運命付けられているとするホイッグ史観に代表される当時の国家的な風潮、時代的な死生観に対しての、批評的な意味も帯びることになったのである。

また教科書によって「ロード・クライヴ」を読んでいた当時の読者も、それを感じることができたはずである。ここに志賀直哉の批評精神を読み取ることができるだろう。作者は、ロード・クライヴが感じた〈運命〉的なものを、語り手が〈偶然〉と感じるに至った過程を描いているが、この違いはクライヴが体現していた「国家のために生き死にする」ということへの志賀の違和感を表しているのである。志賀は積極的に政治関与をせず、この作品に政治的意見を託しているわけではないが、そうであったとしても「ロード・クライヴ」を引用することにより、「城の崎にて」には志賀の同時代のイデオロギーに対する距離感が表明されているといえるのである⁽²¹⁾。「城の崎にて」は、個人の心境小説という形をとりながら、当時のコンテキストにおいて時代的な批評性をも秘めた極めて重要な作品なのである。

〔注〕

* 志賀直哉の文章の引用は原則として『志賀直哉全集』（岩波書店、一九九八—二〇〇一年）に拠った（以下『全集』と略）。ただし、引用部の傍線は全て引用者が付したものである。

- (1) 『白樺』第八巻第五号、一九一七（大正六）年五月一日発行。一九一八（大正七年）、単行本『夜の光』（新潮社）に収録。『全集』第三巻所収。なお、以下、本稿では基本的に時代表記は西暦を用いるが、「城の崎にて」との同時代性を示す場合には、特に元号表記も併記する。
- (2) 谷崎潤一郎は『文章読本』（中央公論社、一九三四年）において、「城の崎にて」の文章について、「書いてあることが（…）はつきりと読者に伝わるのは、出来るだけ無駄を切り捨て、 unnecessaryな言葉を省いてあるから」。「簡にして要を得てゐるのですから、このくらい実用的な文章はありません」と評価している。
- (3) 例えば、重友毅氏は「『城の崎にて』（『文学研究』第四四号、一九七六年十二月初出、『志賀直哉研究』笠間書院、一九七九年所収）において、「これはいささか神秘的な見解のようだが、しかし別に珍しいことでもない。クライヴに限らず、東西古今、似たような例はいくらもある」と、この引用がクライヴであることに特に意味はないと考えている。
- (4) 高梨健吉『英語教科書の歴史と解題』英語教科書名著選集・別巻（大空社、一九九四年）
- (5) 渡辺松茂訳述『瓦連兵須珍虞斯伝』（積善館、一八九〇〔明治二十三〕年）
- (6) 『学習院一覽 時明治三十四年九月 至明治三十五年八月』（学習院、一九〇二〔明治三五〕年）。
- (7) 『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九七年）第十七巻所収。一九一〇〔明治四十三〕年九月十六日、山本喜誉司宛書簡。
- (8) 『旧制高等学校全書 第三巻 教育編』（旧制高等学校資料保存会刊行部、一九八一年）
- (9) 『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九六年）第十二巻所収。
- (10) LORD MACAULAY, *LORD CLIVE*（積善館、一八八七〔明治二〇〕年）。括弧内に(11)末広重恭の訳を参考に拙訳を附した。
- (11) 末広重恭（鉄腸）訳述『印度政略史 原名クライブ公伝』一八八五〔明治十八〕年には次のように書かれている。
「独り筆生ノ室ニ在リテ小銃ヲ装ヒ己ノ頭天ニ向ツテ之ヲ放ツコト二回ナリシニ如何ナル故ニヤ発弾

セズ怪ンデ銃中ヲ検スルニ彈藥ハ充分ニ装填シタリ是ニ於テ其ノワルレン、スタイン氏ガ死ヲ決シテ死スル能ハザリシ時ト同ジク高声自ラ呼ンデ曰ク天ノ我ヲ殺サマル者ハ偶然ニ非ズ必ラス我ヲシテ一大事業ヲ成サシメント欲スルナリト」(略字はカタ仮名に改めた。)

志賀は「愛読書回顧」(『向日葵』一九四七〔昭和二十二〕年一月)において、十一二歳の頃に末広鉄腸作の政治小説「雪中梅」を愛読しており、「面白く思つた」と記述している。「愛読書回顧」は『全集』第七巻所収。

(12) 注 (4) 参照。

(13) 長嶋和彦氏は「クライブ卿興信録—『城の崎にて』の「ロード・クライブ」について」(『国語教室』第101号、二〇一五年、五月)において、国立国会図書館の蔵書をもとに『ロードクライブ』が明治期に広く教科書として採用されており、同書が「将来の日本を担ってゆくことが期待された知識人の卵というべき旧制中学・高校生に広く読まれてい」たことを指摘している。

(14) 今井宏『明治日本とイギリス革命』(研究社出版、一九七四年)

(15) 石原千秋『国語教科書の中の「日本」』(筑摩書房、二〇〇九年)

(16) 『学習院教育要領』(学習院、一八九〇〔明治二十三〕年)

(17) 小田島本有氏は、「〈生〉と〈死〉の狭間 —志賀直哉「城の崎にて」を手がかりにして—」(『釧路工業高等専門学校紀要』36、二〇〇二年十二月)において、「城の崎にて」のロード・クライブ引用箇所について、テキスト本文のみの分析から、「何か」とは、神のような超越的存在が指定されていると考えて良いだろう。クライブは「自分には仕なければならぬ仕事があるのだ」と考える。ここには自らを「有用な人物=選ばれし者」と看做し、それ故に神のご加護が働いたと考えようとする姿勢がある」と書いている。

(18) 宮越勉氏は「『城の崎にて』の重層構造」(『解釈と鑑賞』二〇〇三、八月)において、風がないのに動いている桑の葉の不思議な現象に注目し、「〈動〉と〈静〉が分かちがたく同居していることを示している」とし、それが「蝶姫の不意の死のシーンのいわば前奏の役割を担っている」と示唆的な解釈をしている。

(19) 斎藤努氏は「志賀直哉「城の崎にて」—なぜ「殺されたる范の妻は書かれなかったのか」(『国文学論叢』43一九九八年二月)において、〈動〉と〈静〉の二項対立に注目した数少ない論者の一人であるが、小説の進行とともに、作品後半での二項対立の図式からの変化を「この構図が放棄された」と消極的な意味合いに解釈している。しかし、実際には本稿で考察したように、二項対立を越えて思想が深められているのである。

(20) 草稿「いのち」は、電車事故と城崎温泉滞在の翌年の一九一四(大正三)年、「城の崎にて」執筆の三年前に書かれた。引用は『全集』補巻三巻

(21) 「城の崎にて」についての直接の言及ではないが、高橋秀夫氏は『志賀直哉 近代と神話』(文芸春秋、一九八一年)において、志賀の創作態度について、「上昇気流に乗った明治の社会が押し隠したり、回避したりしなければならなかったネガティブな領域を、志賀直哉は体で知っていたように思うのだ。しかし彼は、それを感覚的、肉体的問題に置きかえることによってしか表現しなかった」と述べている。

藤井懶斎と中村惕斎の啓蒙教化をめぐる試論

—— 女性教訓への取組を中心に ——

董

航

要 旨

藤井懶斎（1628～1709）と中村惕斎（1629～1702）は、江戸前期を舞台に活躍した儒者で、家庭・家族における女性の役割を重要視し、女性の啓蒙教化に取り組んでいた点で共通している。しかしながら、両者が必ずしも同様の思想に基づき同様の行動を取り女性向けの儒教的・倫理的な教訓を実行したとは限らない。本稿は、懶斎と惕斎の女性教化への取組を中心に比較検討を行い、両者の異同を明らかにすることを目的とする。

キーワード：蔵笥百首、比壳鑑、実学、教化、女訓書

はじめに

本稿の課題は、江戸前期に活躍した儒者、藤井懶斎（1628～1709）と中村惕斎（1629～1702）において、女性への啓蒙教化（広義に、著述などにより人間形成のための道徳的・思想的な影響を与える意で教化を考える）の問題がいかに構想されているか、その基本的な取組姿勢を明らかにする。これは、儒教、とりわけ朱子学を聖学正統として篤信する京都の儒者グループにおける教化思想を考察するための、第一段階の作業としての意味を持つ。

戦乱の世の終焉を迎えた近世人は、男女の違いに関係なく日常生活を営む上で必要な「まこと（実・真）の学」を渴望するようになる。にもかかわらず、当代の儒教の諸思想は、漢学的教養の広がりや縁遠い女性が自由に接近できるものではなかった。したがって、上流知識人階級に属する儒者において、人々への啓蒙活動としてどのような動向が見られるか、女性が如何なる契機で問題とされるのか、具体的にはどのような取組姿勢を示したのか、などを確認しておく必要があると考える。

念のために付言すれば、都の錦著『元禄太平記』巻之七「今の学者を指折りてみる」¹において、藤井懶斎と中村惕斎は、伊藤仁斎（1627～1705）、浅見綱斎（1652～1712）とともに「京都の儒者親四天王」と称されている。懶斎に関して、「隠儒にして道を楽しみ、老荘の学問に於ては

此人に次者なし、陸象山と首引きしても負ぬ程の男」とある。致仕後の隠儒生活を楽しみ儒・仏・道三教の学問を修める懶斎だが、中国南宋の儒者、陸象山（名は九淵、1139～1192）に比しても劣らないと高く評価されている。

一方で、惕斎に関しては、「表徳号を的斎といへり、其徳行をくらべては、伊藤は中村が上に立ん事難く、的斎は源助が下にいん事難くなんおぼへける、偕礼楽暦数に於ては、中村氏に及ぶ者なし、是亦大禄を以て彼方より召さるゝといへども、金銀米銭をば比叡山を、十づゝ十重ねても、箸一本とも思はず、只清貧を悦び、西九条に引籠り天命を楽しむ所は、其氣周茂叔と荷負はゞ、棒が折んと思ふ」とある。清貧に安んじて礼楽・暦数・天文などに秀で伊藤仁斎と互いに優劣を決め難い惕斎だが、その気量は中国北宋の儒者、周茂叔（名は敦頤、1017～1073）と肩を並べるものであると賞賛の辞が贈られている。この記述から、懶斎と惕斎は「京都の儒者親四天王」に名を連ねるに相応しい碩学であるということが理解される。

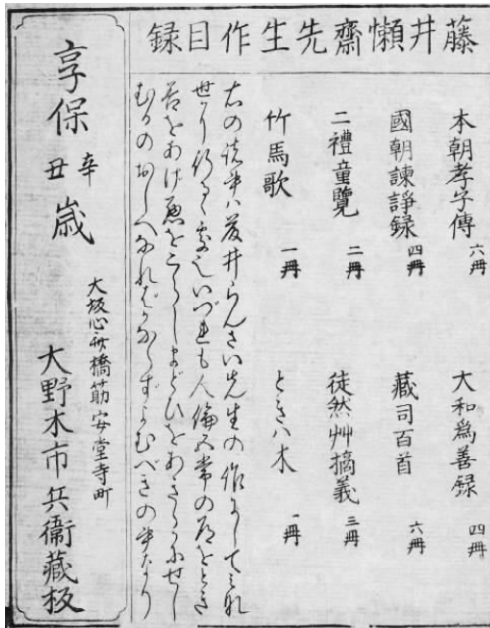
しかしながら、なにゆえ当時彼らが心血を注ぎ漢字仮名交じり文で書き表した女訓書について、明快な考察が十分に行われなかったのだろうか。懶斎の場合、二見田鶴子による『蔵笥百首』の翻刻と紹介²と、筆者が懶斎の教訓型書物群の俯瞰によってその婦道・孝道・善道における一貫性を考察した論考³のみである。また、惕斎の場合も大体同様である。勝又基による『比壳鑑』の写本と刊本の相違点の整理⁴と、任夢溪が朱子学の影響から見た惕斎の女性教育観⁵、張璠による近世日本女性教育思想の考察⁶などの研究があるにすぎない。

そこで、本稿は、以下の第一・二節で藤井懶斎と中村惕斎の経歴を整理しつつ、その儒者として人生における著述教化活動が如何なるものだったかを示す。第三節では、女性に対する啓蒙教化の取組を中心に取り上げる。これらの作業によって、第四節では両者に見る共通点と相違点を指摘する。以上を通して女訓への取組を中心に、懶斎と惕斎における啓蒙教化の比較検討を試みたい。

一、藤井懶斎の経歴と著述活動

藤井懶斎は、儒教思想の実践に努める忠実な信奉者、政治社会での経験者、そして世俗から遊離した学問的な隠遁者である。

懶斎は、元和3（1617）年、京都閑唱寺を開設した僧、了現（生没年不詳）の三男として生まれた。寛永19（1642）年、京都で岡本玄治（1587～1645）に医学を学んだ後、26歳の頃から筑後国久留米藩（現在の福岡県久留米市）に医者として仕え始めた。仕官のかたわら、山崎闇斎（1619～1682）や米川操軒（1626～1678）らと出会った。また、本稿の検討対象でもある中村惕斎とも親しく交わり、朱子学の研鑽を重ねていた。久留米藩では、懶斎は藩医としてのみならず、儒者として有馬家の系図調査や和歌指導などの文事にも携わることを命じられた。こうして



【図①：藤井懶齋先生作目録】

朱子学の探求に没頭し自ら儒書を読んで解釈するなかで、懶齋は、人間の本性を覆うものを取り払い儒教の学問に専念し聖人の道へ近づくことが、人間の本来の歩むべき道であると悟り、致仕帰郷を決意した。延宝2（1674）年、懶齋は、久留米を離れ30年以上の藩医としての仕途を終え京都へ戻った。信従の者を集め儒書の講釈を行い、もっぱら隠儒生活に没入した。隠棲した後半の人生において、大器晩成の懶齋は超然と聖賢の道を楽しみ、旺盛な著述・出版活動に取り組んだ。『蔵筭百首』の裏見返には、図①で示すような「藤井懶齋先生作目録」が付されている⁷。

また、後代には懶齋に関係ない仮名教訓書までもが懶齋作と仮託されるに至った⁸ということ

とも象徴されるように、懶齋の学者像は江戸時代から認められている。例えば、『大和為善録』の改題改竄本とされる『和漢陰陽伝』に序文を寄せた安貴多善民は、「此書乃作者藤井懶齋翁さばかりの碩学鴻儒の大筆を以て、はかなげなる假字につらね、出像をさへ加られたるは、用意必こゝに有べし」⁹と述べ懶齋のことを高く評価している。また、徳川幕府を擁護し朱子学の立場から忠義を唱える儒者、室鳩巢（1658～1734）は、「古風二首呈伊蒿先生藤井徴君」¹⁰と題する詩を創り、「自甘隠淪久、寧辞霜露深、清高有如此、虞羅安可侵」、「揄揚言亦至、微生非所宜、但恨処僻遠、不植君園池、願早充下陳、朝夕近容儀」などといい、君子の徳行を有する崇高な隠儒である懶齋に敬慕の念を示した。

二、中村惕齋の経歴と著述活動

一方、中村惕齋は、一生涯にわたって朱子学に専念した純粋な朱子学者であり、その学問・人格をもって伊藤仁斎と並び称されている。

惕齋は、京都の呉服屋の子として生まれ、1歳の頃のことを覚えているほど記憶力が抜群であった。父はその聡明さを目にしてまだ4～5歳の惕齋に文字の読み書きを教えた。8歳の頃、計算を学ぶ。また、儒教の学問書を読む人に四書を教わり始めた。成長するにつれて、彼は書物を読むことを好み、人間として質素を尊ぶようになる。やがて繁華を好まず、余暇の楽しみも求めず、ただひたすらに儒教を信奉して自己研鑽に励んだ。25歳で家業を継ぐも財利を顧みず、27歳で

閉戸先生と呼ばれる三国時代の孫敬(生没年不詳)に見倣って清閑の地に転居して世俗との付き合いを断った。篤行先生と呼ばれるほどその不世出の超然たる気質や朱子学者としての精誠さを深めていった。

惕斎は、生涯仕官せず師伝もないなかで、朱子学を自学自習で修めた。その学識は広く、天文学から地理学、尺度や計量衡、音楽の技術まで、広範な分野に通じており、多才な学者として高く評価された。惕斎の著述は 80 部にも及ぶといわれており、そのほとんどが門弟や後人によって刊行されたものである。図②は惕斎著書目録を示すものであり、なかには『四書示蒙句解』『孝經示蒙句解』『四書鈔説』『五経筆記』のような儒教經典の注釈書もあれば、『比壳鑑（姫鏡）』など庶民教化に功のある教訓書もある¹¹。

三、懶斎と惕斎の女性に対する啓蒙教化

[16]

(1) 制作動機

『蔵笥百首』は延宝6(1678)年刊で、書名に「百首」とある通り、懶斎が百人一首及び八代集から百首の歌を選んで儒教の教義に基づき教訓的な解釈を行い、婦人の道を説いた漢字仮名交じり文の教訓書である。同書の刊行は懶斎が還暦を過ぎてからの教訓書の著述・出版活動にスタートを切ったからのものであり、きわめて深い意義を持つ。その編纂意図は、懶斎自身が記した序言において明確に書かれている。

人のむすめのわつかに物いふ事をしれるより、おほやうまつ百人一首をならはしむる事いつの世よりぞや、その歌京極黄門のえらひなれは、秀逸は又たくひなかるへし。されとこれをおのこの小大学になづらへて教訓のたすけとせんにさはる事なかるへきや。(中略) その歌の本説にかかはらず、ひたすら婦道のうへにとりなし、ことばをいやしくして注しなさば、かならず女子にたよりせむか。(中略) まことにこれ、敷嶋ややまと言の葉の道にわらひをもとむるのみならず、ひしりかしこきが文見る人のそしりを恐るゝ事またはなはだし。しかるを今しいてなすは、家に一女児ありて母さへなし。我いやしけれはうしろみその人をえず。(後略)

(『蔵笥百首』序¹³⁾)

すなわち、妻を亡くした懶斎は、残された幼い娘のために、当時の男子に習わす小大学などの修身作法書になぞらえて、日本の「言の葉の道」、つまり和歌に関する学問を女性の道に活かし、『蔵笥百首』を編んで与えたのである。懶斎においては、雅文学である和歌を俗文学的な教訓性と結びつけることにより、和語・和文の読み書きと倫理的・道徳的教育、そして和歌を含めた一般教養の育成という、女性にとっての一挙三得の効果を発揮することも期待されていたのだろう。

3巻3冊の『蔵笥百首』に対して、惕斎著『比売鑑』は述言篇12巻と紀行篇19巻という分量を持つ大部の教訓書であると言える。『比売鑑』は惕斎が著述活動を開始した頃に執筆した教訓物仮名草子である。しかし、同書が出版物として刊行されたのは惕斎の没後のことである。述言篇は、宝永6(1709)年に刊行され、立教の事・父子の親・夫婦の別・長幼の序・君臣の義・敬身の事という女性の心得るべき徳目を立てて、和漢の古典を引用して訓戒している。紀行篇は、正徳2(1712)年刊、各徳目に即して鑑みるべき賢女の行状を記述している。同書の制作動機は、惕斎自序に次のように述べられている。

(前略) 四書五経などといふ文は、博士のしるところにて、たはやすくよみまなぶべきにあらず。朱子の小学より幼稚をみちびくためにえらばれて、知りやすく行ひやすきよすがあれば、男女をわかず幼きよりの手ならひぐさ、これぞうへなき物なりけらし。(中略) その文字はをとこもじなり、事は女の事のみにしもあらず、からのやまとの世ならひもおなじからねば、よ

しやつれづれわぶるすさびぞかし。たゞ此の国のかんな文字して、女のために皆みさす手にな
ずらふる水茎のあととはかなき後のかたみにもとおもひなり侍るまゝに、(中略)中にもはるけ
き道に出でたつ足もと、たかき山路にのぼるふもとを心ざして、あとさきもなく書きつゞけ侍
りにき。その大槩は小学をまねびて、前十まきあまり二巻には言をのべ、後の巻々にはみな行
をしるせり。(前略)名づけて比売鑑といふ。(中略)さるは世の女の身をてらすひかりもます
かゞみにぞなりなんと、心にふかくねがへる事しかり。

(『比売鑑』序¹⁴⁾)

つまり、気軽に読み学ぶことのできない四書五経に比して、分かりやすく実践しやすい朱子の『小学』は、男女を問わず幼い子どもを導くために選ばれるべき読み物である。こういった幼少期の教育に用いられる文字も事例も、男女や中国・日本の別を問わず一様でなければならない。しかし、日本には女性が見習うべき手本となるような仮名文字が残っている。筆者、すなわち惕斎もこの伝統を継承・活用しながら、高い山路を登る麓を志して、『小学』を範にとり、女性教化のために『比売鑑』を綴り続けた。書名に「鑑」とある通り、惕斎は、同書が世の女の身を照らす光のような存在となるよう深く願っている。

(2) 思想的特徴

『蔵筭百首』は、懶斎が久留米藩時代、もっと正確に言えば、娘が生まれ、そして妻に死去された万治2(1659)年9月以降に著したものである。同書は、懶斎がそれまでの朱子学や老荘など諸学問を集大成する円熟期の前段階に成立したためか、その思想的な傾向に些か偏りがある。以下、筆者が前掲の別稿にて懶斎の婦道・孝道・善道における一貫性を考察し明らかにしたことを簡単に紹介しておく。

第一に、内治、すなわち実家暮らしの時の娘と他家に嫁いでからの妻・母・嫁という女性の家庭内における人間関係構築のための心構えを強調している。第二に、日本の特殊な条件のなかで儒教の土着化を図ろうとしている。懶斎は、中国発の漢文体の儒教書をそのままではなく、日本人儒者の手で日本化した和文体の教訓書を推奨している。第三に、儒教の代表的な陰鸞思想を神道の八百万の神の考え方に呼应させて神儒融和を図った。その一方で、出家や遁世により社会的役割から逃れる点を追及し仏教を厳しく批判した。第四に、中国儒教の価値観や用語法、人物または事物が日本ではどういうことに当たるのかを一大課題とし、常に「事実」「今世」「我朝」へのこだわりを持っていた。まさしくこの点は『本朝孝子伝』『二礼童覧』『大和為善録』などの教訓書にも共通している。

対して、『比売鑑』は、教養と習字の修得を目指すことや、日本の和歌、故事、逸話を重視・活用することが『蔵筭百首』と共通している。また、前掲任夢溪が「中村惕斎の女子教育観：朱

子学の影響と『比賣鑑』において示した惕斎の女性教育思想の特徴としては、以下のような点が見られる。

第一に貞順は女訓の主旨であり、愛敬¹⁵の根本とされる。そのために、教え手の父母、女師と学び手の女兒や女生徒とどちらも誠の心を持たなければならない。第二に、「貞を体とし、順を用として、片宛にすてず」「徳は体なり、才は用なり」とあるように、体用、いわば本質とはたらきのパラダイムという中国特有の解釈学的・構造的枠組みの概念を活用している。第三に、儒教の「天人合一」説を根幹に天地・陰陽・四時・五行など万物自然の原理を用いて女性の立身処世の道理と方法を提示している。第四に、地理的要因、人倫関係の度外視、慎終追遠の儒教的死生観などの視点から強烈な排仏観を表している。

以上のように、中国で家庭や家族における女性の役割についてその詳細が唱えられているが、日本人女性には漢文体のままではそれが読めない。こうした事情に鑑みて、日本では翻訳または自撰などで娘・妻・嫁・母という人生の各段階における女性に向けて立身・処世のための教化を行わなければならない。このような試みは懶斎と惕斎に共通して見られる。

貞享3（1686）年11月、懶斎は、惕斎の著した写本『比売鑑』に序を寄せた。序文において、同書に賞賛の辞を贈っている。以下では、その一部を示す。

（前略）其ノ文ハ則チ用ヒテ国字ヲ、且ツ多ク引ク倭歌ヲ、欲スル俾^{メント}婦女ヲメ易カラ^カ曉通感発シ也。其ノ事ハ則チ無^ク倭漢ト無^ク古今ト、与レ此^{レト}相干涉スル者、希ナリ不^ニ扨^{ンテ}而取^ラ焉。欲スル令^ニ読者ヲメ博ク覧多ク識^{リテ}而メ随^{ツテ}所^レ遇^フ有^レ取^ル法ヲ也。詳審精密親切著明。未^ダ曾^テ見^ル有^ニ女訓之臻^シ。茲ニ者可^シ謂^レ備^{レリ}矣。（中略）此ノ書若シ徒^ニ知^{リテ}為^ル房闈ノ鑑、而不^レ知^レ為^ル外庭ノ之珍、則チ可^シ惜^ム矣。男女豈ニ有^ニ二性^ニ。（中略）敬甫使^ム余ヲメ加^ヘ鄙語ヲ於篇端ニ。余乃チ欲^{スレバ}略^{ベマク}抒^中其ノ所^ニ以^レ作^ル之^ヲ之意^ヲ。則チ既^ニ具^{ハル}乎自序ニ。非^ズ可^キ復^タ言^フ。故ニ第^ニ称^下述^メ此ノ書於^ニ正^{シク}家^{スル}之道^ニ。将^ニ大^ニ有^{ラント}補^ヒ。以^チ擬^{スル}書題^ニ耳矣。

貞享丁卯冬十一月 伊蒿子膝臧書

（『比売鑑』序¹⁶）

つまり、『比売鑑』は、惕斎が史料を詳しく調査・収集の上、親切かつ平明に記したものであり、「正家之道」、すなわち正しくて理にかなっている家の道には大なる補益のある書である。男女は社会的役割の分担があるものの、人間として備わっている本性は同様である。故に、懶斎は、『比売鑑』は房闈、いわば家の中の女性が鑑みるのみならず、外庭、いわば家の外の男性にも資するものだ、と述べている。

四、両者の異同に関する考察

懶斎と惕斎は、ともに女性が社会生活を送る上で不可欠な道德教育の充実・改善を自身の取り組むべき重点課題に挙げている。しかしながら、女性の道德性・社会性の向上を追求するにあたっては、両者が必ずしも同様の思想と取組を進め倫理的な教訓を実行したとは限らない。以下では、「和歌」「日本化」という二つのキーワードを中心に両者の女性教化に見られる異同について述べてゆく。

(1) 和歌という日本独自の文化の採用

江戸時代の学問の主流は儒教であることは周知に属する。儒教的人倫思想の普及・浸透とともに、中世から女性に必須な知的教養とされてきた和歌も世俗の道德規範と結びついて解釈されるようになる。雅文学である和歌がこの変遷の過程においてどのような役割を果たしたかという視点から見れば、懶斎著『蔵笥百首』と惕斎著『比売鑑』は当該課題の解明に資する史料にもなりうるのではないかと察される。しかし、儒教の教義に基づき、女性に受け入れられやすい言葉を使って和歌を注釈するという点は懶斎独自の特徴である。

例えば、両者の女訓書には「たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなとどめそ」という和歌が引用されている。これは、『古今和歌集』巻八・離別歌に収録されている歌であり、小野千古（884～968）が陸奥国（現在の福島、宮城、岩手、青森の各県と秋田県の一部）の次官として赴任する折に母が詠んだものである。親が守りとして旅立つ息子に添わせてゆく心だけは関所といっても止めないでください、という意味である。懶斎は、

たらちねのおやといひても、たらちねとばかりいひても、みなおやの事なり。（中略）されば人のむすめ成人してのち、おやとわかれざるはなし。わかるゝときおやの御心のをのれにあひそふ事、此歌のごとくとしりて、いかにもして此御心をもとの御身にかへしやすめまいらせたきとおもふべし。さていかにしてかへしまいらせむとなればべちの事はあるべからず。たゞ我心すなをに身のぎやうぎよくして、しうとしうとめおとこにあいきやうありときかせまいらせば、かならずその御心御身にかへるべし。若しからずは大不孝の人ならん。

（『蔵笥百首』第18首¹⁷⁾）

と言い、子を遠方の赴任先に送り出す親心という歌の本義から引き伸ばして、親元を離れて嫁ぎ先で暮らす成人後の娘が養うべき心構え、例えば素直な心で行儀よく振舞い、舅姑に孝養を尽くすなどを中心に訓戒したのである。対して、惕斎は、

此の歌は小野千古といふ人、陸奥へ行きける時其の母のよめるなり。孔子の曰く、父母の年をば知らずばあるべからず。一つには以て喜び、一つには以て惧ると。実に父母の齢の数は常に心に込めて忘れず、かつは其の命長くて在します事を喜び且つは其の末近からん事を惶れて、世にます時に孝養怠かかるべし。樹静らなんと欲しても風静まらず、子養はんと欲して親在さずと云ふは曾子の嘆なり。えて久しうすべからざる者は親に仕ふるを云ふなり。孝子は日を惜むと云ふは揚子が戒なり。

(『比壳鑑』述言卷之二¹⁸⁾)

と言い、読者が親に孝養を尽くす道理をわきまえるよう和文体で分かりやすく戒めたのである。和歌を引用したように、孔子や曾子の言葉も援引している。しかし、女性のみを対象に教訓を実行した『蔵笥百首』と比べれば、『比壳鑑』のほうは、むしろ社会的性差を強調せず一人の人間として守るべき道を説いたものである、と言える。そのためか、懶斎も、同書が女性のみならず、男性にも益するところが少なくないと称えたわけである。

(2) 日本化した儒教の啓蒙書物の推奨

懶斎と惕斎は、ともに学問を修める時に中国儒教の原典や、原典の注釈書、歴史書などを受容し、それらを積極的に自著に取り入れている。しかし、中国渡来の漢語使用の典籍そのままではなく、日本人儒者の手を経て日本化した書物を日本人読者が手に取って学ぶと推奨したのは懶斎独自の特徴として見られる。例えば、懶斎は、

ひじりとは聖人の御事なり。聖人は心素直に慈悲深く、知恵も才覚も世に類なき御人なり。むかし堯舜などと申したるみかどの、聖人にて世を治め給ひしころを、ひじりの御代といふなり。まことに、たかきもいやしきも、男も女も聖人賢人のいひをかせたまふことをかきたる本をよまざれば、真の道しるべきやうなし。さいわいに、このころ女四書、大和小学、列女伝、鑑草などいうもの、平仮名にかきて、世にもてあそべり。人のむすめおさなきより、これらの本よまてはかなふべからず。

(『蔵笥百首』第39首¹⁹⁾)

と言い、貴賤・男女を問わず、人間はみな、聖賢の書から生きる智慧を学ぶと主張している。とりわけ女性は、儒者・辻原元甫(生没年不詳)が女誠・女論語・内訓・女孝経を和訳した『女四書』、儒者兼神道家・山崎闇斎(1619～1682)が『小学』の構成に倣い中国・朝鮮・日本の関連する説話を収集した『大和小学』、歌人・北村季吟(1625～1705)が翻訳した中国の賢女貞女の逸話集『仮名列女伝』、儒者・中江藤樹(1608～1648)が中国善書『迪吉録』を抄録する

形で著した『鑑草』などを幼い頃から読むことを勧める。対して、惕斎は、

女は七つより男に隔たりいて、八つより閨の戸を出でず。母乳母毎々其の傍に据えて怠なく教へよ。(中略)大やう女子は愛敬を旨として言葉形容を柔に、人に事へて物事よくうけ従ひ、万心任ならざる様にと教立つべし。又七つより四徳を兼ねて教ふ。其の事委くし下に記せり。文は小学、大学、論語、孝経、列女伝、女誠など読み習はせ、九つ十の頃より、その道理をも言ひ聴ゆべし。

(『比売鑑』述言卷之一)²⁰

と言い、母親や乳母が女兒を育成する時に持つ心得を強調している。7歳から婦徳（貞順愛敬などの道德）・婦言（言葉遣い）・婦容（容姿）・婦功（料理や裁縫などの生活技能）という基本的な徳を、『小学』『大学』『論語』『孝経』『列女伝』『女誠』という基本的な書を習得させ、9～10歳からその道理が理解できるよう言い聞かせる。つまり、儒教の教えはまず親が会得の上、子に身体に染み込ませるようにしなければならない。それができてはじめて、經典に書かれる言葉の奥義を説明して教え諭すのである。

おわりに

以上本稿では、藤井懶斎と中村惕斎の女性教化への取り組みに着目して、それぞれが如何にして著述を通じて儒教の教義を平易に伝え広めようとしたのかという両者の女訓論の諸相について考察した。

中世の戦乱が遠ざかり泰平の近世で日常生活を営む中で、女性の家庭・家族における役割が意識され始めた。儒教の普及・浸透に伴い、中江藤樹、山崎闇斎、熊沢蕃山など多くの儒者も女性への啓蒙教化に目を向け、教訓書を著述するようになる。本稿の検討対象である懶斎と惕斎もその一例である。

懶斎と惕斎、どちらも俗世間に煩わされず閑静な地に隠居し、学問の研鑽に歳月を重ねていた。それだけではなく、前掲勝又基による藤井懶斎の年譜調査で明らかになったように、両者は笠取山の紅葉を詠み石山の蛸を見に訪れるなど旅仲間でもあれば、賀寿や新年祝いの詩文も互いに贈り合っている。さらに、懶斎が惕斎の著述に序や跋を寄せることや、惕斎の門弟増田立軒が懶斎を訪問すること、肥前国小城郡多久邑（現在の佐賀県多久市）にある多久聖廟の孔夫子像を懶斎と惕斎が共同で設計することなどに象徴されるように、両者は学問上の交流も持っており親交を深めていったのである。

彼らは当代女性の教養としての意味合いの強い和歌を意識的に活用した。しかし、恋などを主

題にして一見儒教的教養と少し隔たる和歌であっても、我が娘が将来の人生指針として参考にできるだろうという親心を込めて、儒教の教義に基づき注釈・訓戒することは、懶斎の特徴である。また、両者はともに中国渡来の儒教的啓蒙書を積極的に読むように推奨した。ただし、懶斎は漢語のままの儒書よりも、日本人儒者の手で日本人読者向けに日本化した和語の儒書の方を強く勧めているように見える。さまざまな学問・芸術が盛んにならび行われる元禄文化の直前段階であるためもあり、両者による女性教化は二者二様で似て非なるものであり、実に興味深い。

しかしながら、よく確認したところ、懶斎著『蔵笥百首』の推薦書目には、儒書のみならず、儒・仏・道三教の教義をとりまぜて民衆教化を図ろうとする中国善書を受容した中江藤樹著『鑑草』のような和製善書も入っているのである。懶斎自身も『為善陰陽』や『迪吉録』などといった中国善書を選択的に摂取し、日中両国の歴史に輝いた59人の善人の善事を蒐集し、『大和為善録』を元禄2(1689)年に世に送った。一方で、惕斎著『比売鑑』には、範孟姜や章氏の妻、林氏の三孝婦など善書によく出現する具体的具象的現実的な例話・物語の援引も見られる。では、中国善書に対して惕斎はどういった取組姿勢で臨んでいたのだろうか。純粋な朱子学者である惕斎でも三教兼用の中国善書を受容したというような可能性があったのだろうか。ここに掲げた疑問を切り口として、近世日本における善書文化の生成とその変容に迫ることが、筆者に課せられた今後の課題ということになる。

〔謝辞〕

本稿は、2023年8月5日に開催された日本比較文化学会中国・四国支部研究発表会（於 香川大学）における口頭発表を基に大幅に加筆・修正した上でまとめたものである。発表に際してご指摘を賜った先生方と、史料調査にご協力いただいた株式会社イノハープインターナショナル取締役星めい先生、作文推敲にご支援いただいた梅光学院大学岡田喜久男教授に、心より深謝申し上げる次第である。なお、本稿は、学校法人梅光学院2023年度学術研究費の助成を受けた研究成果の一部である。

註

- 『西鶴全集 下巻』（博文館、1894年、所収）、国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は913.52-I157s9-O。また、本稿で史料を引用するにあたっては、入力不可能な旧漢字、旧仮名、記号を入力可能な常用漢字、現代仮名、記号に適宜、置き換える。以下同じ。
- 二見田鶴子（1999）『『蔵笥百首』翻刻と紹介』大倉精神文化研究所『大倉山論集』44、289-348頁。
- 拙稿（2021）『藤井懶斎の婦道・孝道・善道における一貫性：『蔵笥百首』とその他の教訓書の相互関係を中心に』日本比較文化学会『比較文化研究』142、221-232頁。
- 勝又基（1999）『『比売鑑』の写本と刊本』日本近世文学会『近世文藝』70（0）、1-10頁。
- 任夢溪（2017）『中村惕斎の女子教育観：朱子学の影響と『比賣鑑』』関西大学大学院東アジア文化研究科『東アジア文化交渉研究』10、431-453頁。

- 6 張璣（2022）『鑑草』『比壳鑑』から見た近世日本女子教育思想（台湾大学日本語文学研究所修士論文）。
- 7 『藏笥百首』国書データベース、和古書請求記号はナ 2-559-1～6。
- 8 勝又基（2017）『親孝行の江戸文化』笠間書院。
- 9 『絵入／和漢陰陽伝』国書データベース、デジタル請求記号はDIG-ORMK-2788。
- 10 『鳩巢先生文集』国書データベース、請求記号は 324-384-4。
- 11 原徳斎（1897）『先哲像伝』第 1 集（裳華書房）国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は特 28-281。
- 12 竹治貞夫（1989）『近世阿波漢学史の研究』風間書房。
- 13 註 7 と同じ。『藏笥百首』国書データベース、和古書請求記号はナ 2-559-1～6。
- 14 『近世女子教育思想 第 2』（日本図書センター、1980 年、所収）国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は FA5-90。
- 15 木下鉄矢（1999）『朱熹再読 朱子学理解への一序説』研文出版では、「喪祭之礼、是因其遗体之在此、市致其愛敬以存之」という『朱子文集』にある一文が次のように読み下されている。「喪祭の礼は是れ、其（父母）の遗体（形見）の比（わが身）に在るに因って、其（父母へ）の愛敬（いとおしみとまごころ）を致して以てこれを存す」という。したがって、ここでは「あいけい」と読み、「いとおしみとまごころ」と解釈してよいと思われる。
- 16 註 14 と同じ。『近世女子教育思想 第 2』（日本図書センター、1980 年、所収）国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は FA5-90。
- 17 註 7 と同じ。『藏笥百首』国書データベース、和古書請求記号はナ 2-559-1～6。
- 18 註 14 と同じ。『近世女子教育思想 第 2』（日本図書センター、1980 年、所収）国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は FA5-90。
- 19 註 7 と同じ。『藏笥百首』国書データベース、和古書請求記号はナ 2-559-1～6。
- 20 註 14 と同じ。『近世女子教育思想 第 2』（日本図書センター、1980 年、所収）国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は FA5-90。

若者の地元就職意向に関する一考察

宋 弘 揚

要 旨

本研究は、山口県の大学生を中心とした若者の地元就職意向について調査し、若者の地元での就職促進・地元定着の方向性を検討した。本研究の調査結果から、地元就職を希望する者は全体の7割を占めることが分かった。そして、山口県出身者の65%が地元の山口県での就職に興味・関心を示した。調査結果を総合すると、若者の山口県内での就職促進・定着のためには、「田舎」に関するイメージの改善と県内企業の認知度向上が必要であると考えられる。

キーワード：山口県、地元就職、地元志向、キャリア教育

1. はじめに

新型コロナウイルスの流行・蔓延が終わった現在、景気の回復とともに、大学生の就職活動が売り手市場になりつつある。2023年5月27日付の日本経済新聞の記事¹⁾によれば、「文部科学省と厚生労働省によると、2023年春に大学を卒業した人の就職率は97.3%で3年ぶりに前年を上回った。新型コロナウイルス流行前の水準に近づいた。コロナ禍で採用を絞っていた業界が採用数を増やし、24年卒の就職活動は売り手市場の傾向がさらに強まっている」という。

地方において、若者は就職等のライフイベントの際に県外に出るのか県内に残るのか、その答えは前者である。山口県の統計によると、同県では、15歳から29歳の若者の県外への転出が顕著で、全世代の約9割を占めている。特に、山口県出身者の大学進学者の約7割が県外に進学、県内大学生の約7割が県外で就職する。このように、若者の県外流出は山口県の重要な社会課題である。

日本は、人口減少問題を国の最重要課題として位置づけ、この問題に歯止めをかけ、将来にわたって活力ある社会を築いていくため、「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、国・地方を挙げた地方創生の取り組みが進められている。山口県においても、2015年から「山口県まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、人口減少の克服に向けた関連施策を展開してきたが、若者を中心とする県外流出の流れは変わらず、依然として、最重要課題である人口減少には歯止め

がかかっていない状況である。同戦略において、「人材の定着・還流・移住の推進」では、流出人口を策定時（2014年）の流出人口である3,647人から半減させるという目標を掲げていたが、実際には半減どころか4,140人（2018年）が流出した。さらに、2020年2月に策定された「第2期山口県まち・ひと・しごと創生総合戦略」においても、人口減少が最重要課題として取り上げられた。その目標である「若者や女性のやまぐちへの定着促進」では、①魅力ある大学等づくりと若者の県内進学促進、②若者の県内就職の希望を叶える就職支援の推進、③女性のやまぐちへの定着、活躍の促進が掲げられている。特に、②の取り組みについて、県内企業の魅力発信、インターンシップの推進、大学等における県内就職・定着に向けた取組の支援、県内就職支援の推進、就職支援協定大学との連携、県外就職説明会の開催などがある（山口県2020）。しかし、こうした施策の実施により、若者の県外流出の防止、県内での（への）就職が促進されるかはまだ不透明である。県内の大学生等の生の声に傾ける必要もある。

大学生等の地元就職意向について、マイナビをはじめとした大手就活サイト等が毎年アンケート調査をしており、その結果により大学生の地元就職意向の傾向を知ることができる。例えば、マイナビが実施した調査によると、地元就職を希望する大学生が増加している（マイナビ2023）。その理由について、地元への愛着や地元の貢献、安定した生活基盤の構築などが挙げられる。また、既存研究の中で、大学生の地元就職意向と結果についての変化に焦点を当てたものと、大学生の地元就職の阻害要因を分析したものがある。前者について、平尾・田中（2016）は、地元志向は就職活動を通じて容易に変化するものとしたうえで、就職活動の前の地元就職の意向と実際の地元就職の結果に大差はないとしたが、非地元志向の者が地元で就職する場合と、地元志向者が非地元で就職する場合の両方の動きを観察し、地元志向は「移ろいやすい」ものとした。その理由について、仕事のやりがいと地元への愛着が就職活動を通じて変化することと指摘した。また、地元志向は「移ろいやすい」もののみならず、「広い」、「弱い」といった特徴があると指摘した研究もある（平尾2021）。ここでの「広い」とは、学生が就職先として意識する地元の範囲は、必ずしも県域と一致するものではないことを指す。そして、「弱い」とは、平尾・重松（2006）が問題提起した地元志向とキャリア形成力の関係が弱いことを指す。これは、地元就職を優先したばかりに、自己分析や業界研究が深まらなくなる現実があるため、学生自身のキャリア形成に結びつかない可能性がある。また、後者である大学生の地元就職の阻害要因を分析したものについて、小磯（2018）によれば、大学生の地元就職を阻害する要因は3つあり、「地元企業の求人が遅い」こと、「地元企業の求人内容が良くない（給与など）」こと、「学内が内定を辞退する」ことが挙げられる。しかし、上述した調査や研究の着眼点は大学生等の地元就職意向であり、地元（もしくは非地元）である山口県への就職意向ではないため、山口県への就職意向に関する分析が必要である。

II 研究の目的と方法

本研究は、山口県の大学生を中心とした若者の地元就職意向について調査し、若者の地元での就職促進・地元定着の方向性を検討することを目的としている。なお、本研究は、「梅光プロジェクトⅢ・Ⅳ」（山口県版PBL事業 提携先：株式会社シーパーツ）のプロジェクトの一環として行われるもので、結果報告について、ステークホルダーの同意を得ている。

本研究の目的を達成するために、アンケート調査²⁾を実施した。調査は、2023年6月～7月に、梅光学院大学文学部3年次に開講される「キャリアデザインⅠ」や、山口大学就職支援室、山口しごとセンターの協力を得て、案内・回収を行った。得た有効回答数は、366件である。

III 研究の結果

1. 基本属性

被調査者の基本属性は、性別、男性116人、女性246人、その他4人である。年齢は、18歳～35歳の間になり、366人の回答者の平均年齢は20.54歳である。

学歴と学年について、大学生（学部生）は340人であり、うち大学一年生67人、二年生41人、三年生152人、四年生80人である。そのほか、大学院生22人、社会人2人、短大生1人、その他1人である。

被調査者の出身地³⁾について、福岡県出身者141人、山口県120人、広島県26人、大分県12人、宮崎県9人、佐賀県6人、大阪府5人、岡山県5人、熊本県5人、愛媛県4人、長崎県4人、島根県3人、鹿児島県3人、沖縄県3人、静岡県2人、香川県2人、茨城県1人、東京都1人、神奈川県1人、三重県1人、京都府1人、兵庫県1人、徳島県1人、高知県1人である。また、外国出身者について、中国4人、ベトナム1人、ドイツ1人である。

2. 就職に関する意識

「就職活動の企業選びにおいて重視することは何か？（3つまで）」という質問に対する回答結果を図1に示す。「社内の雰囲気・環境」（239人）が最も多く、「給料が高い」（176人）、「仕事の内容」（137人）、「ワークライフバランスが取れる」（104人）、「福利厚生充実」（104人）も多く挙げられている。一方、「企業の知名度がある」（15人）、「会社の理念・ビジョン」（22人）を回答した人は少数である。

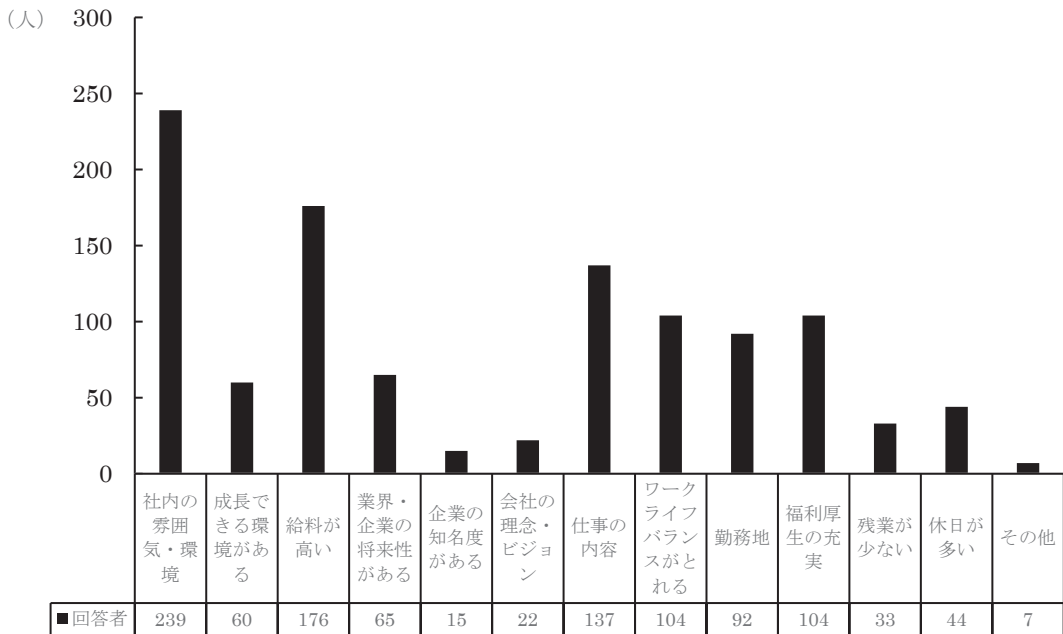


図 1 企業選びの重視要素（複数選択・3 つまで）

（アンケート調査の結果により作成）

次に、「働き方について重視する点は何か？（3 つまで）」について、「有給休暇が取得しやすいか」（300 人）、「どのような方が働いているか」（263 人）、「転居を伴う転勤があるか」（193 人）と回答した人が多い（図 2）。マイナビが実施している「2024 年卒大学生就職意識調査」⁴⁾においても、行きたくない会社を聞いたところ、2022 年卒で 3 位だった「転勤の多い会社」は前年より 3.0% 増の 29.6 % で、2 位になった。それは、在宅勤務やリモートワークの浸透といった社会的背景に加え、男女ともに結婚後も仕事を続けるという意識が高まっていることもあり、転勤に対して消極的であると考えられる。

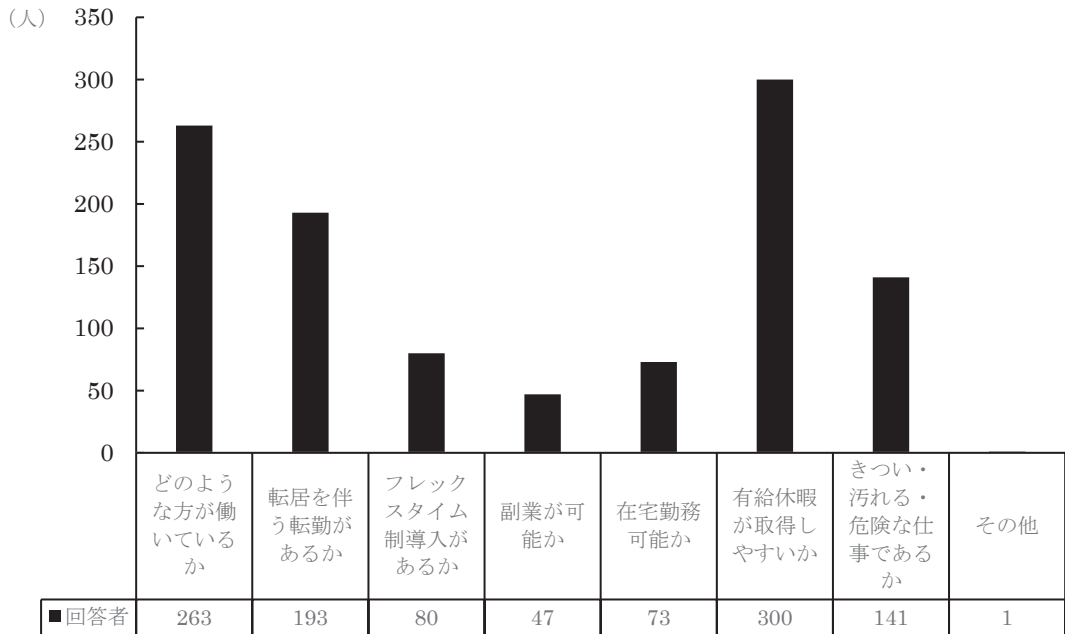


図2 働き方の重視要素（複数選択・3つまで）

（アンケート調査の結果により作成）

近年話題になっている「配属ガチャ」⁵⁾に関する質問で、企業の部署の配属先について、「応募前に決まっているほうがよい」136人（37％）、「入社前まで決まっているほうがよい」153人（42％）、「特に気にしない」77人（21％）である。この結果から、多数の若者は入社するまでに自分がどのような部署に配属されるかについて気になっていることがわかる。これは、働きたい部署へのこだわりが強いのか、配属部署が決まらないう仕事イメージや将来のキャリアが想像できないという不安があることが考えられる。

また、もし希望する配属先に入れなかった場合の対応という質問に対して、「入れないと分かった時点で内定を辞退する」37人（10％）、「配属してみて自分に合わなかった場合、辞退する」226人（62％）、「そのままにする」103人（28％）であるから、希望と異なる配属は内定辞退や早期離職を招きかねないことは明白である。

次に、地方への就職または地元就職を念頭に、大企業と比べ、中小企業に対して若者が抱く印象は、図3の通りである。中小企業のほうが、「他社員との距離が近そう」244人、「能力がより評価されそう」（155人）「転勤・異動が少なそう」（153人）と回答した人が全体の約4割を超えたのに対して、「給料・待遇面で大企業に劣りそう」246人、「将来性があるか不安」172人といったネガティブのイメージを持つ若者が多い。そのため、中小企業が人材募集する際に、大企業との待遇の差の有無、産業や企業の将来性を示す必要がある。

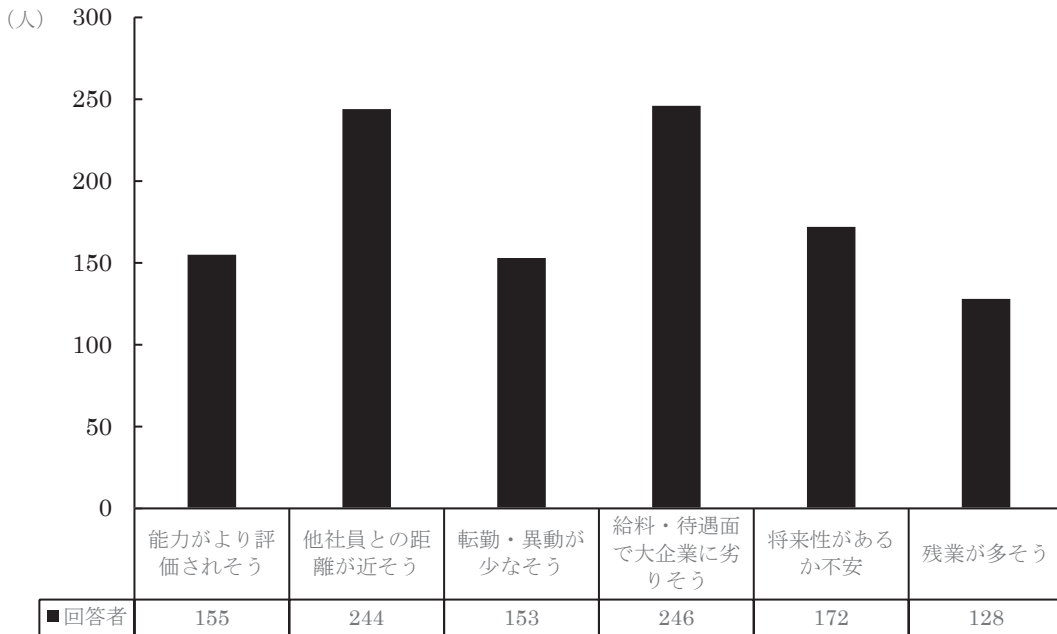


図3 中小企業の印象（複数選択・三つまで）

（アンケート調査の結果により作成）

また、福利厚生⁶⁾について、若者が気になるポイントを図4に示す。育児・介護等の両立支援制度の有無が最も多く、住宅に関する制度の有無やスキルアップ制度の有無も多く挙げられている。一方、社員旅行や健康に関する制度の有無、食事に関する制度の有無を挙げる人は少数である。この結果から、かつての福利厚生の定番と言われる社員旅行等の社内イベントより、ワークライフバランスや経済的な安定に直接的に繋がるようなサポートを希求する若者が多いことが分かった。

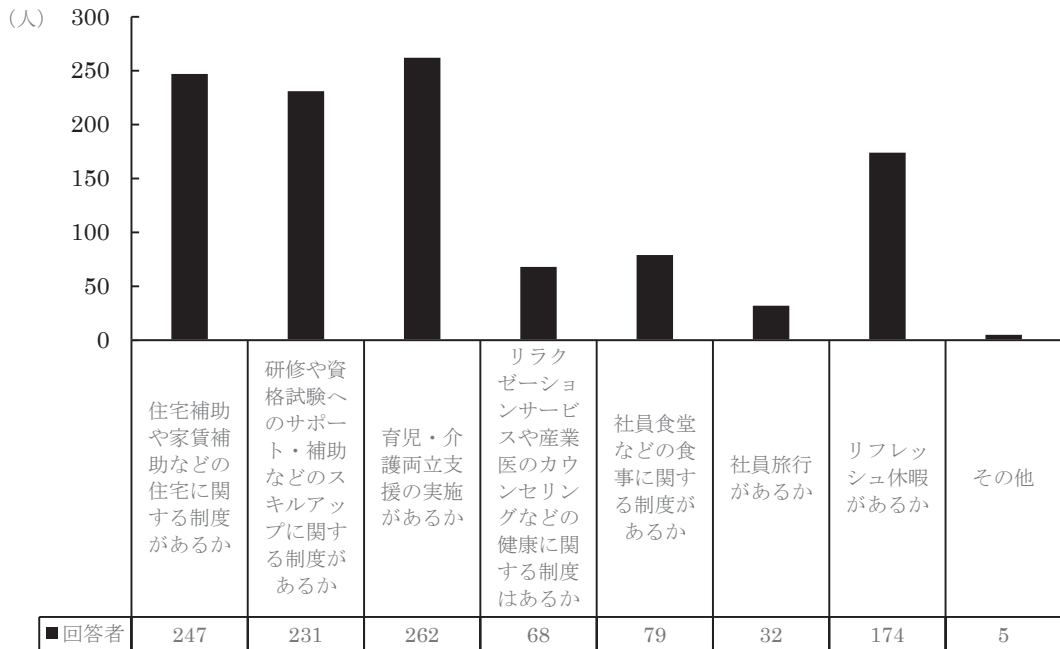


図4 福利厚生のポイント（複数回答・3つまで）

（アンケート調査の結果により作成）

3. 地元就職に関する意向

本節では、若者の地元就職に関する意向の調査結果を分析する。

まず、「地元での就職にはどの程度前向きですか」という質問に対して、「とても前向き」124人（34％）、「どちらかといえば前向き」131人（36％）と回答した人が多い。他方、「どちらかといえば前向きではない」71人（19％）、「全く前向きではない」39人（11％）である。これは、マイナビが毎年実施している「大学生Uターン・地元就職に関する調査」⁷⁾と同様の傾向を示す。同調査によれば、2024年3月卒業予定の全国の大学生、大学院生が地元（Uターン含む）就職を希望する割合は62.6％で、前年同率となった。

次に、地元就職に「とても前向き」と「どちらかといえば前向き」と回答した人に対して、その理由を聞いた結果は図5の通りである。「地元が好きのため」138人、「家族、友人、恋人と離れたくないため」133人と回答した人が多い。これは、地元への愛着や、社会人になる際などのライフスタイルが変化する時期には、家族や友人などが近くにいる環境や、安定した生活基盤を望んでいると推測される。一方、「就職したい企業、団体があるため」と回答した人は58人であることから、地元就職を望む際に、地元にどのような企業があるかについて、あまり関係がないことがわかった。

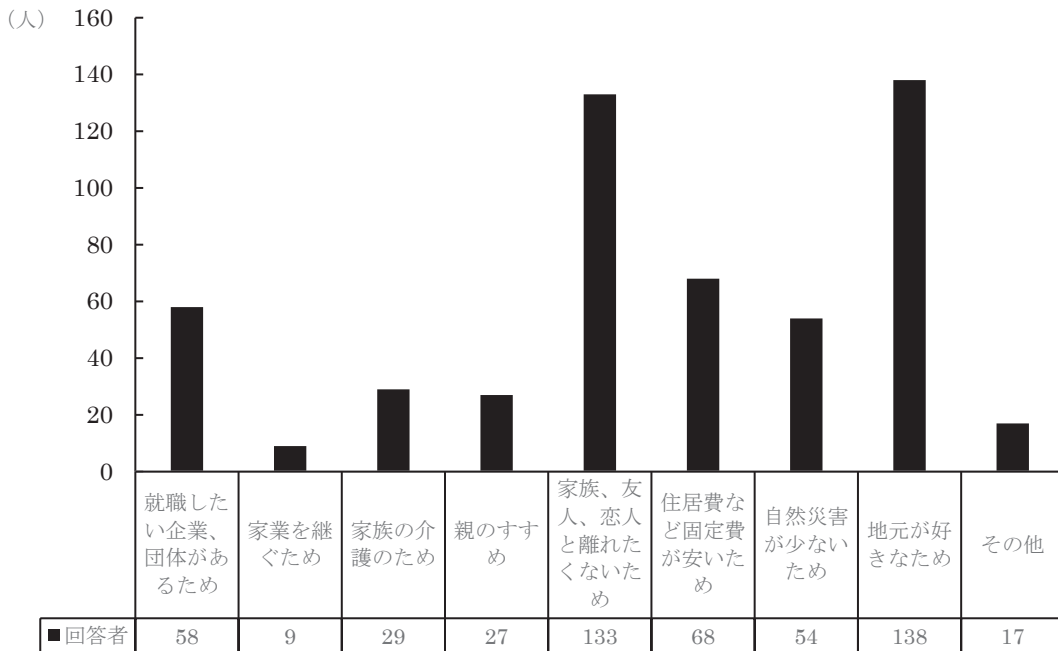


図5 地元就職が前向きの理由（複数回答）

（アンケート調査の結果により作成）

他方、地元就職に「全く前向きではない」と「どちらかといえば前向きではない」と回答した人に対して、その理由を聞いた結果は図6の通りである。「地元の魅力を感じなかったため」50人、「都市部に行ってみたいため」48人、「地元以外に就職したい企業があるため」43人が比較的に多かった。

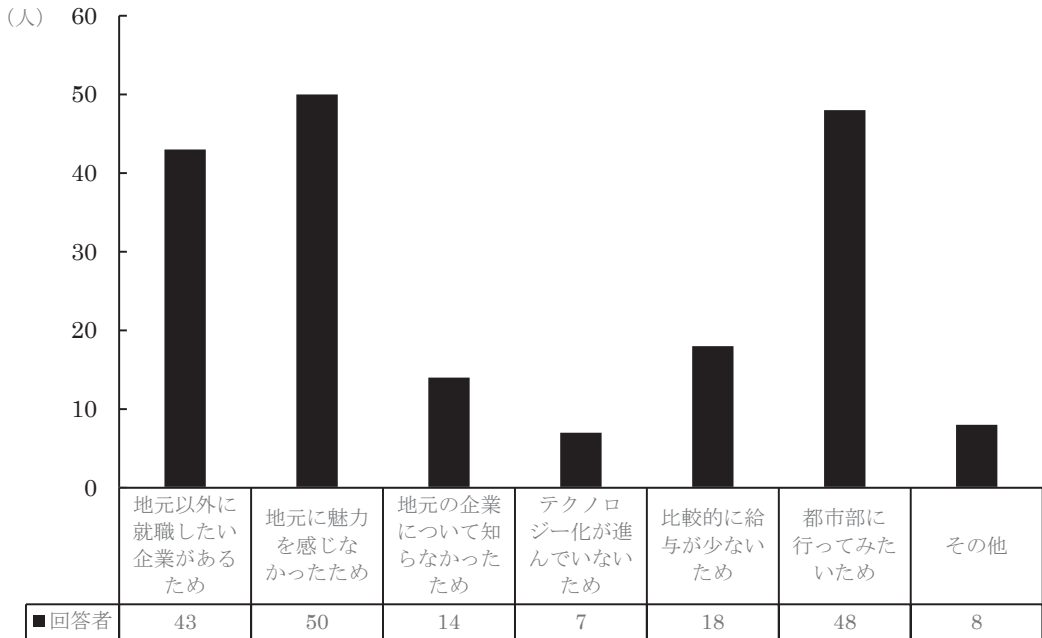


図 6 地元就職が前向きではない理由（複数回答）

（アンケート調査の結果により作成）

最後に、研究対象地域である山口県での就職に関する意向について、分析を行う。

調査の結果、山口県での就職に興味・関心を示す人は131人（36％）で、示さなかった人は235人（64％）である。そのうち、山口県出身者の結果について、興味・関心を示す人は78人で、山口県出身者全体の65％を占める。その理由について、多数の人は地元への愛着、地元への貢献、実家への距離、住みやすさを挙げている。そのほか、公務員や教員といった特定の職業を目指す者も散見される。また、非山口県出身者の結果について、興味・関心を示す人は53人で、非山口県出身者全体の23.5％を占める。その理由について、自然環境の豊かさ、実家との距離、県内大学のため採用されやすそう、山口県の就活情報が入手しやすいなどが挙げられている。

一方、山口県での就職に興味・関心を示さなかった人のうち、山口県出身者は42人、非山口県出身者は193人であり、それぞれ全体の35％と78.5％を占める。山口県出身者の理由について、都会（東京、大阪、福岡）への就職希望、田舎（具体的：交通の便が悪い、遊ぶところがない）、地元を離れたい、就職したい企業がないなどが挙げられる。また、非山口県出身者の理由について、地元か都会への就職希望、田舎、目指す職種がない、山口か山口の企業についてイメージがわからないなどがみられた。

また、調査対象者全員に対し、地元企業に就職した場合、その地域に求めるものを質問した結果、交通の便や、物価の安さ、都会へのアクセスの容易さなどが多数選択されている（図7）。

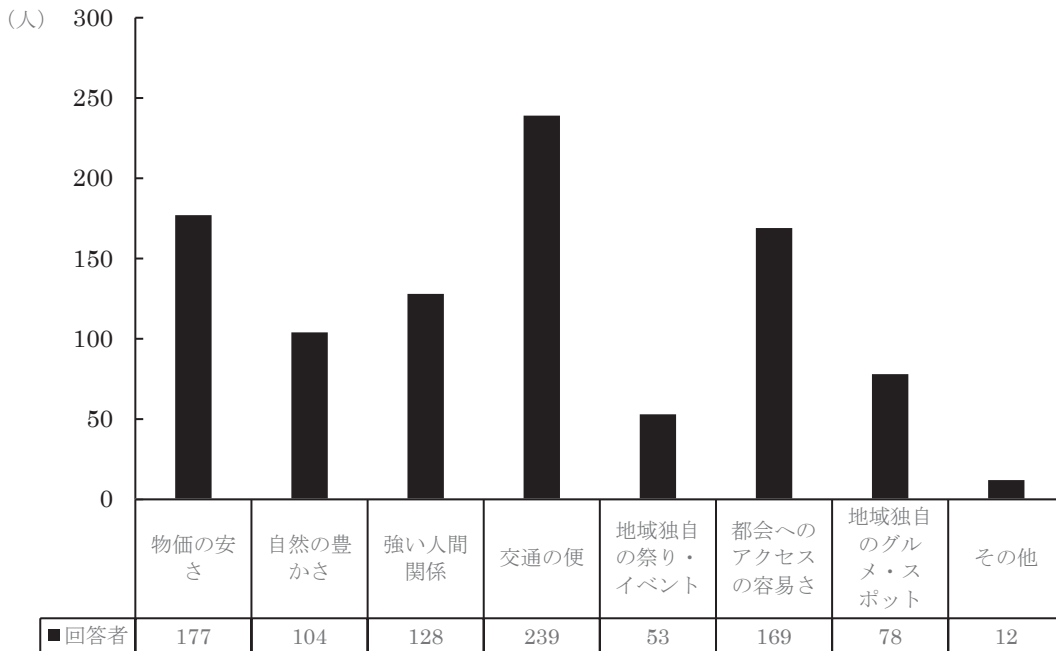


図7 就職した地域に求めるもの（複数回答）

（アンケート調査の結果により作成）

IV 考察

本研究は、大学生を中心とした若者の地元就職意向について調査し、若者の地元での就職促進・地元定着の方向性を検討することを目的としている。まず、地元就職意向について述べる。本研究の調査結果から、若者の地元就職意向は大手就活サイト等の調査結果とほぼ同様で、地元就職を希望する者は全体の7割を占めることが分かった。また、その理由について、地元への愛着や、社会人になる際などのライフスタイルが変化する時期には、家族や友人などが近くにいる環境や、安定した生活基盤を望んでいると推測される。一方、地元就職を望む者の中でも、志望する地元企業の存在を理由とした者は少数である。

次に、山口県での就職意向について、山口県での就職に興味・関心を示す人は全体の3割強を占める。そして、山口県出身者の65%が地元の山口県での就職に興味・関心を示した。この数字は、地元就職を希望する者の割合と大差はないが、言い換えると、35%の山口県出身者が大学卒業時に県外に流出する恐れがあるということである。一方、非山口県出身者にもかかわらず、山口県での就職に前向きな者は、その理由について、自然環境の豊かさ、実家との距離、県内大学のため採用されやすそう、山口県の就活情報が入手しやすいなどをあげている。また、山口県での就職に興味・関心がない非山口県出身者は、その理由について、地元か都会への就職希望、

田舎、目指す職種がない、山口や山口の企業についてのイメージがわからないなどがみられた。

以上の調査結果を総合すると、若者の県内での就職促進・定着のためには、「田舎」（地域の魅力、自然環境、交通インフラ、都会との地理的な距離など）に関するイメージの改善と県内企業の認知度向上が必要であると考えられる。イメージ改善には財政的な制約や長い時間が必要となるが、県内企業の認知度を改善するためのアプローチは比較的短期間で効果的な取り組みが実現可能と考える。具体的には、山口県内の高等教育機関等に在学しているすべての者を対象に、現在の若者の就職や企業選びの意識を念頭に置いた山口県の企業の情報や、就職意識、働き方、福利厚生、部署配属など若者の価値観魅力、求人情報の発信、また、山口県での就職促進を促すキャリア教育、教養・専門教育、就職の斡旋、マッチングシステムなどある。それには、山口県の行政、企業、教育機関などのすべてのステークホルダーが一体となる山口就職促進プラットフォームの構築と実際の運用を行う必要がある。

本研究では、若者全体の地元就職意向の分析を主眼に置いたため、学生の学年ごとの特徴について十分に分析することができなかった。また、調査対象者の所属大学等を調査できなかったこともあり、大学、学部ごとの特徴を捉えなかった。さらに、本研究の対象である山口県では、山口市内の地元意識と下関市の地元意識は大きく異なる。下関市では、生活圏が北九州市と一体となっており、どの程度の下関市出身の調査対象者にとっての「地元」が山口県を指しているかについて、より丁寧な分析が必要となる。これらの点については今後の課題としたい。

謝辞

本研究の実施にあたり、株式会社シーパーツ（取締役社長岡本明宏氏）、山口しごとセンター、山口大学就職支援室等多くの方々から、多大なる御協力をいただきました。そして、アンケートに回答して下さった皆様には、感謝の念にたえません。ここにあらためて感謝の意を表します。また、本研究の調査を設計・分析した際に、2023年度梅光プロジェクトⅢ・Ⅳ（宋3年PBLゼミ）のメンバー計11名（仁科海璃氏、野馬嘉斗氏、梅月駿佑氏、亀山大知氏、川添海翔氏、蔣龍拳氏、濱岡和矢氏、野口海王氏、金子蒼空氏、木村滉大氏、松元彌録氏）と近藤春佳氏の協力を得ました。ここで御礼を申し上げます。

注

1. 日本経済新聞（2023年5月27日）今春の大卒就職率97.3%、「売り手市場」鮮明に コロナ前水準に近づく
<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO71386220W3A520C2EA5000/>
 （2023年11月29日最終閲覧確認）
2. アンケート調査の調査票はMicrosoft Formsで作成し・配信を行った。また、アンケート調査の内容については、株式会社マイナビが実施している「大学生就職意識調査」の質問をもとに、筆者と筆者

- の3年PBLゼミ所属学生、株式会社シーパーツが追加・修正した。
3. ここの出身地を、出身高校の都道府県、または国名と定義した。
 4. マイナビ 2023. 2024 年卒大学生就職意識調査.
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001773.000002955.html>
(2023 年 11 月 29 日最終閲覧確認)
 5. 配属ガチャとは、新卒入社した会社で配属先を選べず、どのような部署に配属されるのか分からない状態を指す言葉である。関連記事：読売新聞（2022 年 10 月 22 日）就活生「配属ガチャが心配」、外れたら「意欲下がる」…内定前に確約・転勤見直す企業も
<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20221022-OYT1T50177/>
(2023 年 12 月 26 日最終閲覧確認)
 6. ここの福利厚生は、社会保険などの「法定福利厚生」を含めず、法定外福利厚生を指す。
 7. マイナビ 2023. 2024 年卒大学生 U ターン・地元就職に関する調査.
https://career-research.mynavi.jp/reserch/20230509_50051/
(2023 年 12 月 29 日最終閲覧確認)

文献

- 小磯重隆 2017. 「地方創生と学生の地元就職」. 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル 1, 97-107.
- 日本経済新聞（2023 年 5 月 27 日）今春の大卒就職率 97.3%、「売り手市場」鮮明に コロナ前水準に近づく
<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO71386220W3A520C2EA5000/>
(2023 年 11 月 29 日最終閲覧確認)
- マイナビ 2023. 2024 年卒大学生就職意識調査.
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001773.000002955.html>
(2023 年 11 月 29 日最終閲覧確認)
- マイナビ 2023. 2024 年卒大学生 U ターン・地元就職に関する調査.
https://career-research.mynavi.jp/reserch/20230509_50051/
(2023 年 12 月 29 日最終閲覧確認)
- 平尾元彦・重松政徳 2006. 「大学生の地元志向と就職意識」. 大学教育 3, 161-168.
- 平尾元彦・田中久美子 2016. 「就職活動を通じた地元志向の変化」. 大学教育 13, 65-71.
- 平尾元彦 2021. 「大学生の地元志向” 移ろい” にかかわる予備的検討」. 大学教育 18, 33-37.
- 山口県 2020. 「第 2 期山口県まち・ひと・しごと創生総合戦略」.
- 読売新聞（2022 年 10 月 22 日）就活生「配属ガチャが心配」、外れたら「意欲下がる」…内定前に確約・転勤見直す企業も
<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20221022-OYT1T50177/>
(2023 年 12 月 26 日最終閲覧確認)

サービス・ラーニングにおける地域パートナーとの 関係構築の可視化に関する研究

馬 場 洸 志

要 旨

本研究は、筆者が取り組むサービス・ラーニングの実践において、実践に関与する地域パートナー間の関係構築過程を可視化し、関係性の構築度合を検証することを目的としている。長期間継続的に取り組まれることが望まれるサービス・ラーニングの実践が単発で終わってしまう最大の要因として、サービス・ラーニングに関与する主体間の関係性が十分に構築されていないためと言われている。よって、実践を長期的に取り組むために、本研究では筆者が取り組むサービス・ラーニングの実践に関与する主体間の関係性を、10段階の階層性を示す「関係性の連続体」に当てはめて可視化した。結果として、10段階の関係性のうち、筆者の実践は第7階層目に位置づくと明らかとなった。

キーワード：サービス・ラーニング、地域パートナー、関係性、可視化、SOFARモデル

1. 研究の背景と目的

1. 日本の高等教育におけるサービス・ラーニングの導入と発展

サービス・ラーニング（以降SL）とは、学校（大学）での既習事項を、地域のニーズに適合した地域活動に応用し、意図的に構造化された省察を通して活動を振り返りながら、学習を拡張的に発展させる経験主義的教育手法である（倉本, 2008 ; 馬場, 2022）。アメリカで誕生したSLを日本の高等教育において初めて導入したのが国際基督教大学である。国際基督教大学がSLを導入した1999年は、大学審議会（1998）における「学外の体験を取り入れた授業科目の開設などにより社会の実践的な教育力を大学教育に活用する」といった方針が示されたのと同時期であった。その後も、日本の高等教育の課題が量的規模から質の保証に移っていき、教師によるTeaching主体から学生によるLearning主体へと力点を変えていく必要性があり、従来の一斉形式の講義による授業だけでなく、様々な参加型学習を実施する工夫が求められてきた。その具体的学習形態の例として、ゼミやセミナー、PBL（Problem Based Learning）、SLなどの形態が挙げ

られている。また、質的転換に向けた更なる課題の一つとして「地域社会や企業など、社会と大学の接続についての課題」が挙げられており、学外からの支援の中で地域社会や企業による体験・実践活動のための協力が重要であると述べられている。この課題に対する具体的な改革方策として、社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つ SL やインターンシップなどの教室外学修プログラムの促進のために、地域社会や企業等と大学は、地域・企業参画型の新たな連携・協力に取り組むことが重要であると提言されている（中央教育審議会, 2005, 2008, 2012 ; 日本学術会議, 2010）。このような背景のもと、大学と地域社会との連携を強固なものにすることを目的とした「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」が開始され、その取り組みは「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」へと発展し（文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課, 2013, 2016）、SLを包含した地域参加型学習¹⁾が日本の高等教育において広がっている。

2. 日本の高等教育におけるサービス・ラーニングの実践研究の推移

SLの実践が増加するとともにSL研究も増加するわけだが、SLの取組が広がり始めた2013年前後を境に、学生の学習成果に関する評価研究が増加し始める。例えば、木村・中原（2012）は、SLが学習成果として社会参加志向や汎用的能力の獲得に及ぼす効果について実証的に検討している。山田・尾崎（2013）は、SLを任意に選択することの態度特性の変化を、自己評価シートをもとに測定している。白井ら（2017）は、SLを通して得られる汎用能力の測定と評価をするための指標として、ループリックと学修ポートフォリオを開発し、活動内容の異なる実践の評価を通してコモンループリックを試作している。この他にも、明石（2014）、木村・河井（2015）、山口・河井（2016）、北島ら（2016）など、学生の学習成果に焦点を当てた評価研究は散見される。このように、この時期に学生の学習成果に関するSL評価研究が増加した理由として、有川（2021）は、SLの実践が増加していたこの時期において、カリキュラム開発・導入といった文脈の中で、教育活動である以上、学生や学生グループの成長を評価する尺度が必要であったと考察している。

その後2020年代前後になると、SOFARモデルを援用したSL研究に注目が集まり始める。SOFARモデルとは、学生（Students）、地域の団体（Community Organizations）、教員（Faculty）、大学職員（Administrators）、住民（Community Residents）という5つの主体（constituency）がどのように影響し合い関係性を構築しているかを可視化するフレームワークである（Bringle et al., 2009）。このモデルによって、大学と地域という2つの主体間の構造が拡張され、地域における複層的な関係構造があることを可視化できるだけでなく、5つの主体間に10通りの関係と相互作用があることを示すことができる（図1）。

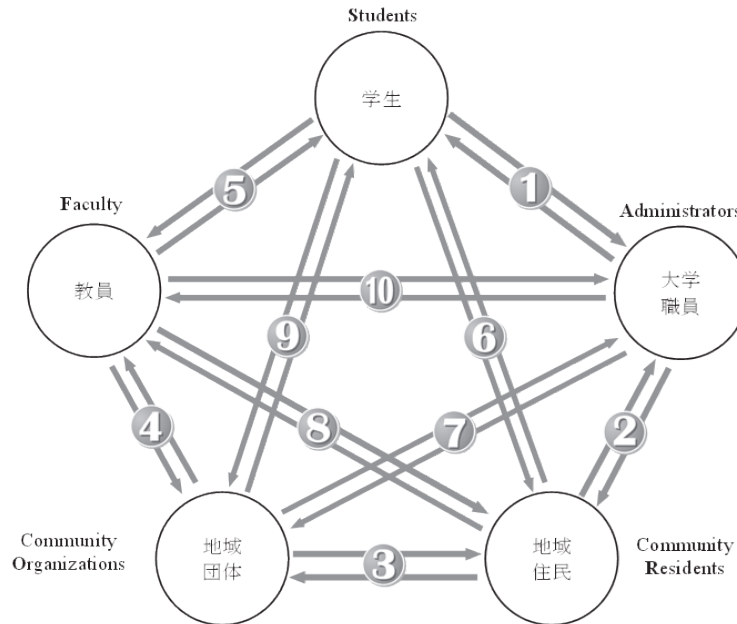


図 1. SOFAR モデル

市川・秋元（2018）は、SLは多様な主体が関与しており、互恵的で対等な関係を構築しながら評価を進める重要性和、その主体と長期的に関係を構築しながら多様な主体が評価に参加する形成的評価の在り方を主張している。唐木・大滝（2020）は、SOFARモデルを活用しながら、実践の活動の広がりや多様な主体との関係性の深まりを可視化する重要性を述べており、SLの取組が単発で終了してしまう最大の欠陥要因として、「SOFARにおける利害関係者間の関係性が十分に築かれていないことである」（p.22）と述べている。また、SLの取組をSOFARモデルから説明することで、取組の強み・弱みに気づくことができるとも述べている。一般的な教育実践では、基本的に教員と学生のみが関与しているため、その実践の評価はこれら二つの主体を対象とすれば良いわけだが、SLのように様々な主体が関与する実践においては、その主体らの関係性やその関係の構築度合も実践の良し悪しに影響するという特徴を持つということがこれらの先行研究から明らかになってきた。

3. 本研究の目的

以上のように、実践に関与する主体間の関係性を可視化し、その関係性の構築度合を明らかにすることは、良質なSL実践開発には不可欠である。よって本研究では、筆者が取り組むSL実践において、実践に関与する主体間の関係構築過程を可視化し、関係性の構築度合を検証することを目的とする。

II. 調査・分析の方法

1. 調査対象の実践

調査の対象とした実践は、筆者が所属する梅光学院大学（所在地：山口県下関市）の4年ゼミ（科目名「梅光プロジェクトV」〔前期〕と「梅光プロジェクトVI」〔後期〕）内で実施したSLとなる。この実践は2022年度から開始し、山口県内の海洋ゴミ問題解決に寄与する活動に取り組んでいる。山口県が位置する日本海側には、韓国との間に対馬海流が流れており、この海流の関係上、日本国内からのゴミだけでなく、中国・韓国からのゴミの漂着も多く、山口県（下関）に漂着するゴミの量は日本一とされている。2019年度の海洋ごみ調査の結果においても、全国10地点のモニタリング調査地内で²⁾、1位の下関は漂着ゴミの量が21648リットルであり、2位の函館（北海道）の5334リットルを大きく上回っている（環境省水・大気環境局水環境課海洋環境室，2021）。この現状が若者に認知されていないことを踏まえ、2022年度は若者への海洋ゴミ問題の認知度を向上させる活動に取り組んだ。

海洋ゴミ問題に加え、山口県は観光インバウンドの伸び悩みや、山口県の魅力が他県に伝わりきっていないと言う点を課題視している。他県からの観光客数では、同じ中国地方の広島県に100万人ほどの差があり³⁾、観光で行きたい都道府県ランキングにおいても39位と下位10県に入っている（DIAMOND online, 2021）。この背景を踏まえ、2023年度は、「海洋ゴミ」と「観光問題」の解決を目的とした「エシカルツーリズムの促進」に取り組んだ。エシカルツーリズムとは、「持続可能な社会や未来のために、人や環境、旅行先・地域に配慮した旅行」（近畿日本ツーリスト, 2022）を意味する。

主な活動地域として、2022年度は角島（下関）、2023年度は角島と阿武町（山口県北部）で活動に取り組んだ。それぞれの地域パートナーは、角島は「NPO法人コバルトブルー下関ライフセービングクラブ」（以降コバルトブルー）、阿武町は「ABUキャンプフィールド」である⁴⁾。2023年度から阿武町が活動地域として加わった経緯として、2023年度に「やまぐち海のSDGsサポーターズ支援事業」に採択されたことが理由となっている。同事業は、大学、民間団体、NPO法人等が、企業や学校、自治体などの他者と連携して取り組む海洋ごみ対策に対して支援を実施する取組であり（山口県廃棄物・リサイクル対策課，2023）、海洋ゴミ問題対策に取り組んでいる筆者の元に同事業への申請の話が舞い込んだ。県の担当者からこの事業の説明をうけた際、筆者の取組（角島での活動）に加えて、阿武町にも取組を広めてもらえないかと打診されたことがきっかけとなり、2023年度は阿武町にも活動の幅を広げることになった。

なお、関係性構築過程の可視化として対象とするのはコバルトブルーのみとする。コバルトブルーは2022年度の実践開始間もない頃から関係構築が始まっており、本実践の基盤を共に作りあげてきたパートナーでもある。一方、ABUキャンプフィールドとの関係性は2023年度以降か

らであり、調査対象とするには関係構築が浅い。よって、関係性構築過程の可視化の対象としてコバルトブルーのみに絞ることが妥当だと判断した。

2. 分析方法

本研究における分析方法は、唐木・大滝（2020）の分析方法を参考に分析する。唐木・大滝は、SOFARモデルにおける5つの主体間がどのような関係性を築いていったのかを明示し、示した関係構築の詳細が、「関係性の連続体（Relationships Continuum）」（Bringle et al., 2009）のどこに位置付けられるかを考察するという手法で関係性を分析している。関係性の連続体とは、SLを通じて形成される地域と大学の関係性の質について、「他者に関心をもたない（unaware of the other person）」から、「一方的な気づき（unilateral awareness）」、「コミュニケーションを相互にはかる（communication with each other）」、「相互に活動を調整する（coordination of activities with each other）」、「計画的系統的なリーダーシップ（planning and formalized leadership）」、「共通の目標に向かって活動する（working for common goals）」、「資源を共有して活動する（working with shared resources）」、「目標の融合（integration of goals）」、「シナジー効果が生まれる（synergistic）」、そして相互に深い影響を与え合う「変容的（transformational）」な関係まで10段階の階層性のある姿として示したものである（図2）。

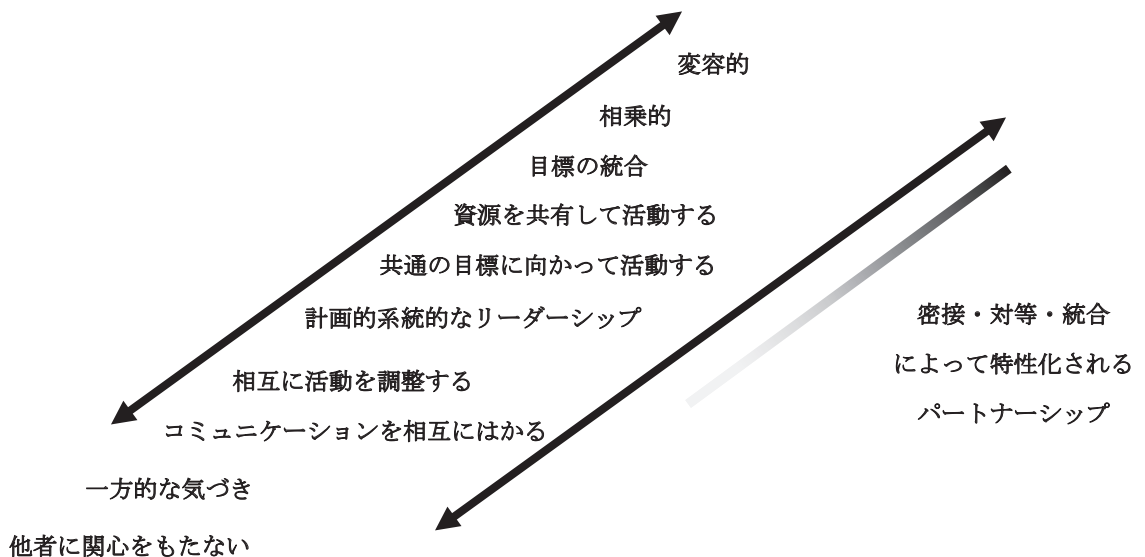


図2. SLにおける関係性の連続体
（〔Bringle et al., 2009〕をもとに筆者作図）

日本における SOFAR モデルを援用した研究は市川・秋元（2018）、唐木・大滝（2020）、秋元（2020）、尾崎ら（2022）などが挙げられるが、SOFAR モデルを用いて SL 実践に関与する主体間の関係性を可視化し、その関係性を分析している研究が唐木・大滝（2020）のみになるため、唐木・大滝の研究手法に準拠することが妥当だと判断した。よって、本研究での分析・考察は以下の手順で行う。

- ① 本実践に関与する主体を洗い出し、SOFAR モデルに落とし込む。
- ② 本実践の関係性構築過程を、活動詳細として時系列順に可視化する。
- ③ 関係性の連続体における 10 段階の階層のうち、これまでのコバルトブルーとの活動がどの階層に当てはまるかを考察する。

3. 倫理的配慮

本研究で研究対象となる個人に対しては、名前を特定化できないようにすべて匿名にした。また、ゼミ生や団体等に対しては、その活動記録を学会発表や論文等で表記することについて、承諾を得た。

III. 分析・考察

1. SOFAR モデルに基づく主体間の関係性の可視化

本研究に登場する主体は表 1 のとおりとなり、その主体を SOFAR モデルに落とし込んだものが図 3 となる。そして、2022 年 4 月から、2023 年 12 月までの本実践に係る活動の詳細を時系列順に示したものが表 2 となる。2023 年 12 月は年度途中であるが、地域パートナーとの活動が 12 月までであり、1 月以降は卒業研究発表準備など、学生の活動がメインとなる。よって、関係性の可視化は 2023 年 12 月までとしている。表 2 の右列は、SOFAR モデルにおける 5 つの主体間の活動がどのように作用したのかを示している。丸数字は、主体間相互の関係性を示すために付けた番号であり、図 3 の丸数字と連動している。また、コバルトブルーとの関係性を分析するうえで重要となる年月には色を付けており、その部分については「2. 関係性の連続体に基づく考察」内で詳述する。

表 1. 本実践の主体一覧

SOFAR	ステイクホルダー名
S（学生）	2022 年度：梅光学院大学 学生（3 名） ⁵⁾ 2023 年度：梅光学院大学 学生（21 名）
O（地域団体）	・しものせき環境みらい館 ・(株)ライフスタイル研究所 ・山口県廃棄物・リサイクル対策課 ・コバルトブルー ・ABU キャンプフィールド
F（教員）	筆者
A（大学職員）	梅光学院大学の職員（以降 大学職員）
R（地域住民）	山口県民

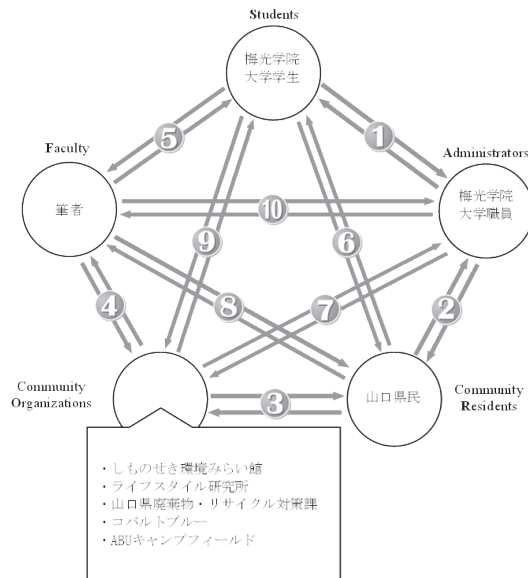


図 3. 本実践の主体を落とし込んだSOFARモデル

表 2. 本実践に係る活動の詳細

No.	年月	活動内容	SOFARモデル
1	2022.4.	どのような地域課題に取り組むかの議論や地域課題調査が始まる。	⑤ F ⇄ S (ゼミ生)
2	2022.6.	取り組む地域課題が「海洋ごみ問題」に決まり、解決案の考案が始まる。	⑤ F ⇄ S (ゼミ生)
3	2022.7.	学生が企画した内容を授業内で発表し、フィードバックに基づく修正を加える。	⑤ F ⇄ S (ゼミ生)
4	2022.7.	学生は、下関市のごみ問題を取り扱う「しものせき環境みらい館」(みらい館)との接触を始める。	⑨ S → O (みらい館)
5	2022.8.	教員(筆者)が、みらい館館長から海洋ごみ問題に関する更なる情報をヒアリングする。ヒアリングの結果、角島を拠点にするNPO法人が海岸清掃に力を入れていることを知る。	④ F → O (みらい館)
6	2022.8.	みらい館からのヒアリング内容を学生にフィードバックした結果、角島での活動に興味を示す。	⑤ F → S (ゼミ生)
7	2022.8.	筆者が担当する「ボランティア論」という授業で暮らしスタイル研究所と協働授業を1コマ実施することになり、角島で海岸清掃に尽力するコバルトブルーを紹介頂く。	④ F ⇄ O (ライフスタイル研究所)
8	2022.8.	教員と学生の協議のうえ、海洋ゴミ清掃の活動場所を角島に絞り、活動協力を得るためにコバルトブルーと話し合うことが合意形成される。	⑤ F → S (ゼミ生)
9	2022.9.	筆者と学生がコバルトブルーと打ち合わせをし、ゼミの取組を説明する。活動に賛同頂き、協力を得られる方向となる。	④ F → O (コバルトブルー)
10	2022.10.	コバルトブルーから、海洋ゴミ拾いだけでなく、マリンアクティビティも体験することで、海洋環境そのものに興味を持ってもらうことができるのではと提案頂く。結果として、海洋ゴミ清掃とマリンアクティビティを合体させた「海洋環境体験プログラム」を実施することとなる。	④ O (コバルトブルー) → F
11	2022.10.	「海洋環境体験プログラム」を開催する。なお、同プログラムには地域で活動するライフセーバーやサーファーなどもプログラム・スタッフとして参加する。同プログラムにはゼミ生以外の学生にも参加を募った。	③ F ⇄ O (コバルトブルー) ⑥ S ⇄ R ⑨ S ⇄ O (コバルトブルー)
12	2022.11.	「海洋環境体験プログラム」で拾ったゴミを使用し、大学祭で大学祭参加者とともに、海洋ゴミ問題の認知向上のためのアート作品を完成させる。	⑥ S ⇄ S (学内学生) R (山口県民)
13	2022.12.	大学職員より山口県廃棄物・リサイクル対策課(対策課)の職員を紹介され、県が『やまぐち海のSDGsサポーターズ支援事業』(支援事業)の申請者を募集している旨を伺う。	⑩ A → F
14	2023.1.	対策課と打ち合わせを行い、これまでのゼミの活動を説明する。対策課から支援事業への申請を提案される。その際、山口県阿武町(ABUキャンプフィールド)との協働を提案される。	④ F ⇄ O (対策課)
15	2023.2.	対策課、阿武町役場、ABUキャンプフィールドと、支援事業にて協働していく旨を打ち合わせる。	④ F ⇄ O (対策課) (阿武町役場) (ABUキャンプフィールド)
16	2023.2.	支援事業の骨子が固まる。支援事業においてABUキャンプフィールドと協働していく旨をコバルトブルーに説明し、コバルトブルーにも支援事業に協働頂くことになる。	④ F → O (コバルトブルー)
17	2023.4.	2023年度のゼミが始まる。海洋ゴミ問題に関する基礎学習が始まる。	⑤ F ⇄ S (ゼミ生)
18	2023.4.	支援事業に申請する。	④ F → O (対策課)
19	2023.5.	支援事業に採択される。	④ O (対策課) → F
20	2023.6.	筆者、コバルトブルー、ABUキャンプフィールドでクラウドファンディングの目標金額設定が行われ、返礼品について話し合われる。	④ F ⇄ O (コバルトブルー) (ABUキャンプフィールド)
21	2023.6.	コバルトブルー主催「トヨタソーシャルフェス」(後援:山口新聞、協賛:トヨタ)という海岸清掃イベントに参加する(上記の海洋環境体験プログラムのようなイベント)。	③ S ⇄ R (山口県民) ④ F ⇄ O (コバルトブルー) ⑨ S ⇄ O (コバルトブルー)
22	2023.7.	8月下旬、9月初旬に実施するゼミ合宿(2泊3日)の内容について、調整を行う。	④ F ⇄ O (コバルトブルー)
23	2023.8.	阿武町での合宿(2泊3日)を実施する。合宿中の大きな取組内容は以下のとおり。なお、これらに取り組みながら、観光PRビデオの作成、阿武町のPRのための広報活動(SNS投稿)などを行っている。 1日目:海岸清掃、ABUキャンプフィールドでのテント張り体験 2日目:ABUキャンプフィールドが提供する里山体験プログラムに参加 3日目:振り返り	④ F ⇄ O (ABUキャンプフィールド) ⑤ S ⇄ R (山口県民) ⑨ S ⇄ O (ABUキャンプフィールド)
24	2023.9.	角島でのゼミ合宿(2泊3日)を実施する。合宿中の大きな取組内容は以下のとおり。なお、これらに取り組みながら、観光PRビデオの作成、角島のPRのための広報活動(SNS投稿)などを行っている。 1日目:角島の観光資源調査のためのフィールドワーク 2日目:コバルトブルーが提供するプログラム(サウナ)を体験 3日目:海岸清掃、マリンアクティビティ	④ F ⇄ O (コバルトブルー) ⑤ S ⇄ F ⑨ S ⇄ O (コバルトブルー)
25	2023.10.	筆者、コバルトブルー、ABUキャンプフィールドでクラウドファンディングの詳細について話し合い、クラウドファンディングを申請する。	④ F ⇄ O (コバルトブルー) (ABUキャンプフィールド)
26	2023.11.	支援事業の活動途中報告会に参加する。維新みらいふスタジアム(サッカーJ2のレノファ山口ホームスタジアム)で行われたイベントには多くのレノファ山口サポーターが来場しており、その方たちに活動内容を発表した。	⑥ S → R (山口県民)
27	2023.11.	クラウドファンディングに対する支援協力を募るイベントを学内で開催。	— S → S (学内学生)
28	2023.12.	クラウドファンディングが終了し、結果をコバルトブルー、ABUキャンプフィールドに報告した。	④ F → O (コバルトブルー) O (ABUキャンプフィールド)

2. 関係性の連続体に基づく考察

表2の活動のうち、関係性の連続体の各階層に当てはまる活動は表2で色付けした部分となり、それを関係性の連続体に位置付けたものが図4となる。結果として、本実践におけるコバルトブルーとの関係性構築の度合は第7階層目に位置づいている。

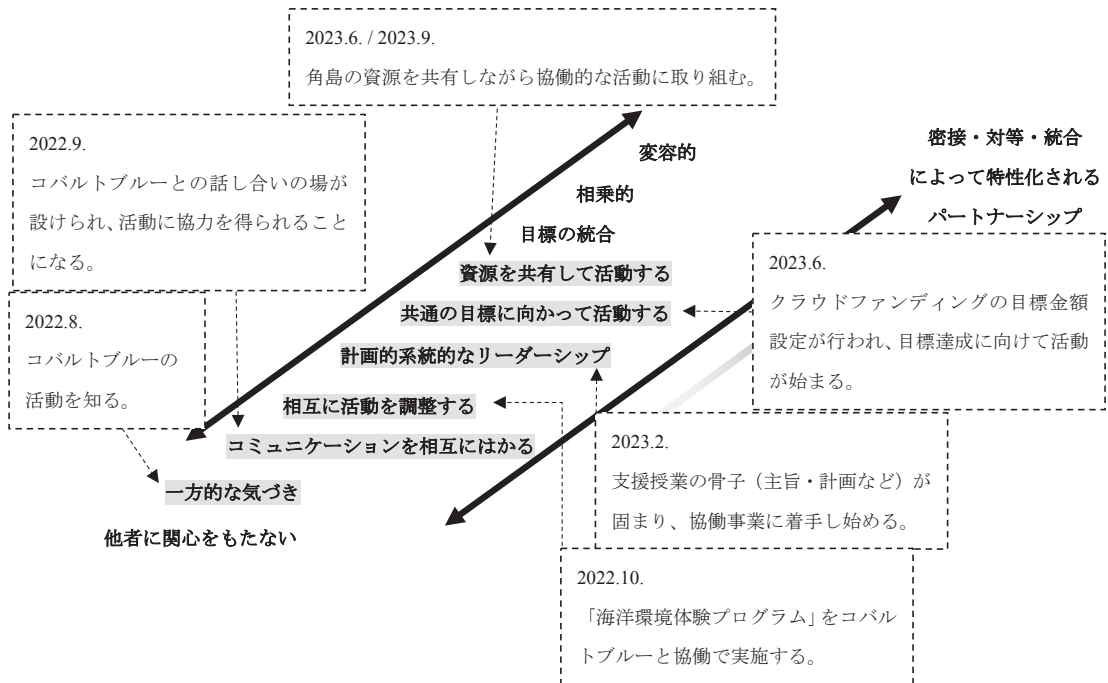


図4. 関係性の連続体における本実践の位置づけ

先ず2022年の8月に、筆者がしものせきみらい館（以降 みらい館）を訪問し、下関における海洋ゴミ問題とその対策活動に関する情報をヒアリングした。みらい館とは、下関市が回収した資源ごみを選別する施設であり、リサイクル施設の見学やリサイクルの体験の提供など、資源ゴミのリサイクル啓発なども行っている。みらい館館長からのヒアリングの結果、角島で活動するNPO法人（コバルトブルー）が、海岸清掃に注力しているという情報を得る。この時点で、筆者がコバルトブルーの存在や活動を初めて知り、コバルトブルーに興味を持ち始めたことから、この時期の活動がコバルトブルーに対して「一方的な気づき」を持ち始めたことが窺える（第2階層目）。

これと同時期に、筆者が担当する「ボランティア論」という授業の中で協働することになったライフスタイル研究所という企業から、コバルトブルーを紹介頂けることとなった。そして、2022年9月にコバルトブルーと話し合いの場が設けられることとなり、ゼミの取組に賛同頂き、

協力頂けることとなった。このことから、「コミュニケーションを相互にはかる」環境が整った時期であると言えよう（第3階層目）。

コバルトブルーとコミュニケーションを重ねる中で、海岸清掃だけでなく、コバルトブルーが提供するマリナクティビティも学生に体験させてみてはどうかと提案を受ける。この意図として、マリナクティビティを体験させ海洋環境そのものに興味を持たせることで、海洋環境維持の啓発になるという主旨であった。筆者及びゼミ生はこの提案に賛同し、この取組を「海洋環境体験プログラム」と名付け、ゼミ生だけでなく、学内の学生にも参加者を募り、開催する運びとなった。この出来事から、筆者（ゼミ）とコバルトブルーの間で「相互に活動を調整する」関係性に発展していることが窺える（第4階層目）。

その後、海洋環境体験プログラム内で回収した海洋ゴミを使用した、「海洋ゴミ問題への認知度向上」を目的としたアート作品をゼミ生が作成する活動⁶⁾が行われる。結果的に、ゼミの活動が山口県の補助金事業「やまぐち海のSDGsサポーターズ支援事業」（以降 支援事業）へと発展することになる。ゼミの活動（海洋ゴミ問題への取組）が学内でも認知されるようになり、大学職員から、支援事業および事業の窓口担当者を紹介頂き、2023年の年明けから支援事業への申請に向けた詳細が山口県廃棄物・リサイクル対策課（以降 対策課）と進み始めることになった。2023年のゼミの取組に阿武町を加えることを対策課から打診され、この事業にコバルトブルーだけでなく、阿武町のABUキャンプフィールドも加わることとなった。そして、2023年2月には支援事業の骨子（主旨・計画など）が固まり、支援事業に向けた協働が始まった。このことから、筆者が支援事業の代表者という立場で「計画的系統的なリーダーシップ」を発揮しながら、コバルトブルーを含む事業の関係者を巻き込んでいった様子が窺える（第5階層目）。

支援事業に正式採択された後の2023年6月、筆者・コバルトブルー・ABUキャンプフィールドの間でクラウドファンディングの目標金額を設定し、応援者からの支援に対する返礼品を何にするのが確定した。2023年度の取組が「エシカルツーリズムの促進」であることは先述したが、その仕掛けがクラウドファンディングとなっている。本ゼミ、両地域のパートナーが一つのチームとなり、角島・阿武町への観光促進となるような返礼品（リターン）を用意し、それに対する支援金の一部を海洋ゴミ削減支援に活用するという構図である（図5）。それを達成するために、ゼミ生が角島チームと阿武町チームに分かれ、現地での観光資源を体験しながら、海岸清掃に取り組み、両地域での体験を基に作成した観光PR動画を用いて観光誘致を行うのである。

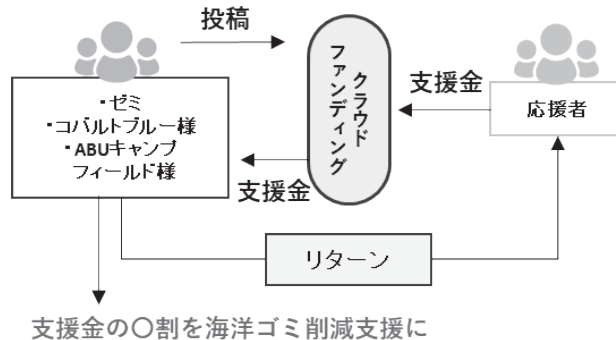


図 5. クラウドファンディングの構図

クラウドファンディングという「共通の目標」が設定されたことで、目標達成に向け各々が取り組むべき活動が始まった（第6階層目）。

2023年6月にはコバルトブルーが主催する「トヨタソーシャルフェス」に筆者・学生ともに参加した。このイベントは上述した「海洋環境体験プログラム」と同じ趣旨のイベントで、海岸清掃だけでなく、マリンアクティビティ体験を通して海洋環境に興味をもってもらおうというイベントである。このイベントに参加した総勢約50名近くの山口県民とともに海岸清掃に取り組み、角島の資源（海・マリンアクティビティ）を体験した。2023年9月には角島でのゼミ合宿を行い、角島地域一体のフィールドワーク、コバルトブルーが提供するサウナ・プログラムの体験、海岸清掃、マリンアクティビティに取り組んだ。これら活動と並行して、観光PRビデオの作成、角島のPRのための広報活動（SNS投稿）などを行った。以上のように、角島での「資源を（コバルトブルーと）共有して活動」している様子が窺うことができ、この時点でのコバルトブルーとの関係性構築の度合は第7階層目に到達したと言える。

5. まとめ

以上のように、筆者が取り組んだ2年間の実践において、地域パートナー（コバルトブルー）との関係構築度合は、「関係性の連続体」の第7階層目に位置づけることが明らかとなった。「関係性の連続体」において、地域と大学の関係性が「一方的な気づき」から「変容的」へと移り変わる過程に、「密接（closeness）」、「対等（equity）」、「統合（integrity）」が深く関係するとされている（Bringle et al., 2009）。

「密接」は①交流の頻度、②交流の基礎となる活動の多様性、③他者の態度、決定、計画、目標に及ぼす影響の強さの3つの要素から構成される。この2年間の間に筆者（ゼミ）とコバルトブルーの交流頻度が時間の経過とともに頻繁になるにつれ、そこから派生する活動が多様になっていることが上の分析・考察からも窺うことができるであろう。そして、ゼミの取組がコバ

ルトブルーの年間計画や、活動実行の決定に影響を及ぼしていることから、本実践の主体間における密接さが関係構築に反映されていることが推察される。

「対等」は、インプット（実際に取り組まれた活動）とその活動成果がつり合いのとれたものとなっているかどうかの度合を示している。2022年度の成果として、若者の海洋ゴミ問題に対する認知度向上に貢献し、2023年度はクラウドファンディングという形で（目標金額という目に見える形で）エシカルツーリズムの促進に貢献した。SLの成果に関する研究において、地域に対して目に見えるような成果（実体的な成果）が伴いにくいとも言われているため（Gibson et al., 2020）、目に見える形で成果を導いた点は一定の評価に値するであろう。しかし、インプット（実際に取り組まれた活動）と活動成果（クラウドファンディングの結果が21%）が釣り合っているかどうかについては、更なる分析が必要となる。

そして「統合」は、地域の問題とその解決策を明らかにし、変容後の世界がどのようなものになっているかというビジョンを提案できるような状態になっていることを指している。2年間の実践では、「変容後の世界のビジョン」までは提案できなかった。本実践は第7階層目に位置づいていることが明らかになったが、残りの3階層分（「目標の統合」、「相乗的」、「変容的」）まで関係構築度合を高めるためには、今後協働して取り組むべき目標を統合し、「対等」な成果を生み出すことでお互いの相乗化を図り、変容後の世界のビジョン提案まで取り組むことが望まれる。

本研究により、筆者の実践を客観的に捉え、現時点での関係構築度合を明確にできたことにより、2年間でどこまで関係性を構築できたのか、更なる関係性構築（SL実践の長期発展）には何が不足しているかを明らかにすることができた。しかし、本研究では関係性の可視化と、取り組んだ事象のみによる分析であり、地域パートナーに対するインタビュー調査やアンケート調査を含めるまでには至らなかった。今後は、今回の研究結果を基に、地域パートナーの視点も含め、長期の関係構築方策を探っていきたい。

付記

本稿は山口県「やまぐち海のSDGsサポーターズ支援事業補助金」と「梅光学院学術研究費助成」の助成を受けた研究成果の一部である。本研究は実践で協働頂いた地域パートナーの方々のご協力なしでは実現しなかった。ご協力頂いた全ての方々に心より感謝の意を申し上げる。

【注】

- 1) 地域社会と連携し、教室外での学生の学びを促進する教育実践は「地域参加型学習（Community Engaged Learning）」と呼称されており、SLやインターンシップ、ボランティアといった正規課程・非正規課程（準正規課程）の教育実践を包括的に捉えた教育・学習形態である（山口, 2020; Otto and Duens, 2021）。

- 2) モニタリング調査は稚内、函館、深浦、羽咋、八丈、淡路、高知、松江、下関、奄美の10地点となる（環境省水・大気環境局水環境課海洋環境室, 2021）。
- 3) 2019年の都道府県別、観光入込客数（実）・観光消費額単価・観光消費額（日本人・観光目的）の県外からの宿泊客数において、広島県は212.7万人、山口県は101万人となっている（観光庁観光戦略課観光統計調査室, 2022）。
- 4) コバルトブルーは、角島（下関市）を拠点に、ライフセーバー養成を主事業としながら、地域活動として海岸清掃に取り組むNPO法人である。ライフセーバー養成プログラムだけでなく、マリナクティビティの提供、ゲストハウスの運営も行っている。ABUキャンプフィールドとは、「道の駅阿武町」に隣接するキャンプ場であり、㈱あぶクリエイションが運営している。
- 5) 筆者は梅光学院大学に2022年4月に着任し、2022年度のゼミが初年度となる。2022年度のゼミでは、ゼミ生23名を3チームに分割し、各チームが調査した地域問題に対して、各チームが考案した地域問題解決方法でアプローチするという手法をとっていた。2022年度のゼミ生23名のうち、3名が海洋ゴミ問題に取り組み、その取り組みが2023年度のゼミ全体の活動へと発展した。
- 6) 2022年度のゼミでは、海洋ゴミ問題に対する認知度が若者の間で低いことに着目し、自分たちが海岸清掃で回収した海洋ゴミを使用したアート作品を作成することとなった。なお、自分たちで作成するだけでなく、予め描いておいた基盤画に、大学祭の参加者が海洋ゴミを貼り付け、海洋ゴミに関する情報を伝えながらアート作品を完成させるという活動を行った。より詳しい詳細は、「<https://note.com/lit4hiphop/n/nf2c73713a11d>」(L.I.T.-Hip Hop Development Group, 2022) に活動の記録をブログとして残しているので参照頂きたい。

【参考文献】

- 明石留美子 (2014). 「国際福祉開発フィールドワークの学習効果を学生はどのように認識するか:国際サービスラーニングの視点から学生の学習認識を評価する」, 『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』, 143, pp.217-235.
- 秋元みどり (2020). 「大学と地域のパートナーシップのアセスメントをめぐって—大学と市民活動団体との連携事例を通じた検討—」, 『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』, 35, pp.24-38.
- 有川かおり (2021). 「日本におけるサービス・ラーニングの評価に関する文献レビュー」, 『聖徳大学研究紀要』, 32, pp.53-58.
- 馬場洸志 (2022). 「アメリカの高等教育機関における Community Engagement Professional に関する研究～サービス・ラーニングコーディネーターに焦点をあてて～」, 『愛知教育大学大学院教育学研究科博士学位論文』, pp.1-126.
- Bringle, Robert G. Clayton, Patti H. and Price, Mary F (2009). Partnerships in Service Learning and Civic Engagement. *Partnerships: A Journal of Service Learning & Civic Engagement*, 1 (1), pp.1-20.
- 中央教育審議会 (2005). 『我が国の高等教育の将来像（答申）』, (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/_icsFiles/afiedfile/2013/05/27/1335580_001.pdf, 2023. 3.15)
- 中央教育審議会 (2008). 『学士課程教育の構築に向けて（答申）』, (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2008/12/26/1217067_001.pdf, 2023. 3.15)
- 中央教育審議会 (2012). 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』, (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/

- toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf, 2023. 3. 15)
- 大学審議会(1998).『21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－(答申)』.(https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm, 2023. 3. 15)
- DIAMOND online (2021).『観光で行きたい都道府県ランキング 2020【完全版】』.(<https://diamond.jp/articles/-/259929?page=3>. 2022. 9. 13)
- Gibson, H., Canfield, J., & Beamish, A. (2020). Understanding Community Perceptions of Service-Learning, *Journal of Service-Learning in Higher Education*, 11, pp.5-20.
- 市川享子、秋元みどり (2018).「サービス・ラーニングと社会変容のための評価枠組みの構築」,『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』, 30, pp.43-55.
- 唐木清志、大滝修 (2020).「SOFARフレームワークを活用した高校生のボランティア活動の評価－初等中等教育におけるサービス・ラーニングの導入の手がかりを探る－」,『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』, 35, pp.10-23.
- 環境省水・大気環境局水環境課海洋環境室 (2021).『令和元年度海洋ごみ調査の結果について』.(<https://www.env.go.jp/content/900517319.pdf>, 2022. 9. 13)
- 観光庁観光戦略課観光統計調査室 (2022).『共通基準による観光入込客統計』.(<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/irikomi.html>, 2022. 9. 13)
- 木村充、中原淳 (2012).「サービス・ラーニングが学習成果に及ぼす効果に関する実証的研究－広島経済大学・興動館プロジェクトを事例として－」,『日本教育工学会論文誌』, 36 (2), pp.69-80.
- 木村充、河井亨 (2015).「サービス・ラーニングにおけるチームワークが学生の学習成果に及ぼす効果」,『ボランティア学研究』, 15, pp.87-97.
- 北島葉子、大宮めぐみ、影山智絵、村上淳 (2016).「サービス・ラーニング(学校給食支援ボランティア活動)に関する検討その意識変化と教育効果について」,『中国学園紀要』, 15, pp.43-50.
- 近畿日本ツーリスト (2022).『江田島でエシカル・ツーリズムをはじめよう!』.(<https://www.knt.co.jp/tabiplanet/kokunai/221020/>, 2023. 6. 11)
- 倉本哲男 (2008).『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究～サービス・ラーニング(Service-Learning)の視点から』, ふくろう出版.
- L.I.T.-Hip Hop Development Group- (2022).『【学生目線】海洋ゴミ×グラフィティアート』.(<https://note.com/lit4hiphop/n/nf2c73713a11d>, 2023.6.17)
- 文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課 (2013).『地(知)の拠点整備事業』.(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/05/20/1346067_03.pdf, 2023. 3. 15)
- 文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課(2016).『地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)』.(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/10/28/1378661_01_1.pdf, 2023.3.15)
- 日本学術会議 (2010).『大学教育の分野別質保証の在り方について』.(<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>, 2023.3.15)
- Otto, Elizabeth.and Dunens, Elizabeth (2021). Imparting the Skills Employers Seek: Community-Engaged Learning as Career Preparation, *Journal of Community Engagement and Higher Education*, 13 (1), pp.39-56.

- 白井靖敏、鷺尾敦、原田妙子 (2017). 「サービス・ラーニングにおける COMMON RUBRIC の検討」, 『名古屋女子大学紀要』, 63, pp.75-87.
- 山口県廃棄物・リサイクル対策課 (2023). 『やまぐち海のSDGsサポーターズ支援事業補助金』.
(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/40/203974.html>, 2023.6.17)
- 山口洋典、河井亨 (2016). 「サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方」, 『京都大学高等教育研究』, 22, pp.43-54.
- 山口洋典 (2020). 「地域参加型学習において言語化を促進する意味とその方途」, 『立命館大学国際言語文化研究所』, 31 (3), pp.73-87.
- 山田一隆、尾崎慶太 (2013). 「サービ斯拉ーニング受講を契機とした大学生の態度特性変化ー活動の随意性に着目してー」, 『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』, 22, pp.77-88.

梅光型PBLが受講学生に及ぼす効果

—— 教員へのインタビュー調査から ——

真 田 穰 人¹⁾
赤 堀 方 哉²⁾

要 旨

本研究では、導入当初から継続的に梅光型PBLを担当している教員にPAC分析を行い、梅光型PBLが受講学生に及ぼす効果について検討を行った。その結果、梅光型PBLでは地域企業と連携し、大人数のゼミ形式による課題解決が行われるなかで、協働的課題解決能力、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力等の伝える力が向上する可能性が示された。また、PBLのなかで社会や企業、地域や大人と出会い、そして社会そのものを体験的に学ぶということ自体が学習の成果であるとともに、先述した力の要因となっている可能性が示された。さらに、学生の主体的なキャリア形成に寄与している可能性が示唆された。一方、それらの成果を継続したり、全てのゼミで共有したりするためには、担当教員が学生やチームのアセスメントを行い、必要最低限で適切な介入を行い、見通しをもって授業を展開する必要があるため、企業連携PBLの授業スキルの共有が課題となることが示された。

キーワード：PBL，企業連携，産学連携，教育効果

I 問題と目的

2023年6月に「第四期教育振興基本計画」が閣議決定された。高等教育においても、社会の持続的な発展を生み出す人材養成を行っていくために、「正解主義」から脱した授業改善を行っていくことが求められ、課題解決型学習（PBL）等によるアクティブ・ラーニングの充実などに取り組む必要があるとされている。日本の大学においては2000年ごろからPBLが普及され始めたとされている（山口，2017）。文部科学省によると大学におけるPBLの導入率は2011年度の

1) 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科

2) 梅光学院大学 子ども学部

20.8 %（文部科学省,2013）から 2021 年度に 42.4 %（文部科学省,2023）に増加しており、今後 も PBL の普及をより促進していくことであろう。

本学が所在する山口県では、「企業と教育機関が連携して取り組む課題解決型の教育プログラムの実施に向けた環境整備」を目的として、2018 年度より PBL の普及を促進している。山口県の平成 30 年度予算において PBL を含む「山口県の明治 150 年記念 未来へ繋ぐ人材育成事業」に約 3000 万円が計上され、県として PBL コーディネーターを雇用し、PBL シンポジウムを開催するなど県内大学の PBL 活動を支援している（山口県、2018）。その後、所管部署、予算額等は変化しながらも、2023 年度においても県の支援は続いている。このような山口県の積極的な取り組みの背景には、山口大学が 2015 年に国際総合学部を設置したことが挙げられる。そこでは、従来の卒業論文に代えて、「企業や自治体と連携したプロジェクト型課題解決研究」を必修化し全学生が取り組むことになった（山口大学,2014）。この山口大学国際総合学部の PBL をモデルにしながら、山口型 PBL として県内大学に普及を図っていると言える。山口型 PBL の特色として、①パートナーと覚書を交わす、②企業から資金提供を受ける、③教員の専門性にはこだわらない、④単位化する、⑤コーディネーターが介在する、などが挙げられている（福屋、2020）。これらの特色を大まかな合意として、各大学がそれぞれの実情に合わせてかねてより柔軟に運用されている。

さて、本学では「オール・アクティブラーニング宣言」を行い、「自分の考えを人に伝える力」、「周囲と協働する力」、「課題を発見し、解決する力」（梅光学院大学,2023）の育成に取り組んでいる。このプログラムの中心の一つが PBL 型ゼミである。本学では、2020 年度より必修の 3 年ゼミをすべて PBL 型としており、約 300 名の学生が 20 程度のプロジェクトに分かれて実施している。また、本学は文学部と子ども学部の 2 学部の大学であり、学生の専攻も教員の専門も、経済やビジネスは少なく、文学や語学、教育学に偏っている。そのため、提携企業の業種やニーズと学生・教員の専門性が一致することは少なく、③の教員の専門性にこだわらない PBL の担当が不可避となっている。したがって、山口型の PBL を踏襲しながらも、梅光型 PBL は① 3 年生全員が必修として取り組む、②教員、学生の専門性にはこだわらない、③ 1 プロジェクトが 20 名程度の比較的大人数である、と定義することができる。

このように、組織として PBL に取り組んでいることを、直接に学生と向かい合う教員がどのように受け止め学生と向かい合っているのか、また、PBL を通した学生の成長をどのように評価しているのかを明らかにしていくことは、PBL の教育効果を高め大学教育の質保証に取り組んでいくためには肝要なことであると考えられる。

そこで本研究では、連想刺激に基づいての自由連想や多変量解析を援用して、操作的・客観的に個人別にイメージ構造を分析することができる PAC 分析（内藤、2002）を用いて、長年梅光型 PBL 実践を担当してきた教員を対象にインタビューを実施し、梅光型 PBL の成果と課題につ

いて明らかにすることを目的とする。少数事例であっても、継続的に実践している教員の視点から本学で実施されている梅光型PBLの効果の構造分析ができる可能性があり、これまでの実践の成果と課題を検討できると考えられるからである。

II 方法

1. 調査協力者：調査協力者は、研究の趣旨および参加に同意した、梅光学院大学においてPBL導入当初から実践に携わった教員2名（A、B）であった。

2. 調査時期：2023年2、3月

3. 手続き：面接は第1著者が担当した。連想刺激としては、以下のような刺激文を提示するとともに、口頭で読み上げた。

「あなたは、企業と連携した本学3年生PBLの学びが学生に及ぼす効果について、どのような印象をもっていますか。どのようなことを学生が学ぶことができたと感じていますか。また、どのような力を学生が身につけることができたと感じていますか。頭に浮かんだ文章やイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

ついで、内藤（2002）を参考に、用意したカード（縦3cm、横9cm）に想起させた順に連想内容を記入させた。その後、重要だと感じられた順に番号を記入させた。次に項目間の類似度距離行列を作成するために、1：「非常に近い」～7：「非常に遠い」の7段階尺度で評定させた。そして、作成された類似度距離行列に基づき、ウォード法でクラスター分析を行った。第2回の面接では、以下の手順で、デンドログラムの結果について調査協力者のイメージを聴取した。

まず、調査協力者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を読み上げ、項目群全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として感じられるものについて質問した。その後、群間比較させてイメージや解釈の異同を聴いた。さらに、デンドログラム全体のイメージや解釈について報告させた。これらの作業に続いて、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない（0）のいずれに該当するのかを回答させた。

III 結果と考察

1. 調査協力者Aの結果

重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果は、図1の通りであった。重要順位を1/3まで取り上げると、①社会とのつながり、②企業で働くことのイメージ、③チームで働くということ、④計画をたてて働くということ で、学外に出て実際に企業や社会とつながるなかで、働くことそのものを体感できることに効果を感じている。

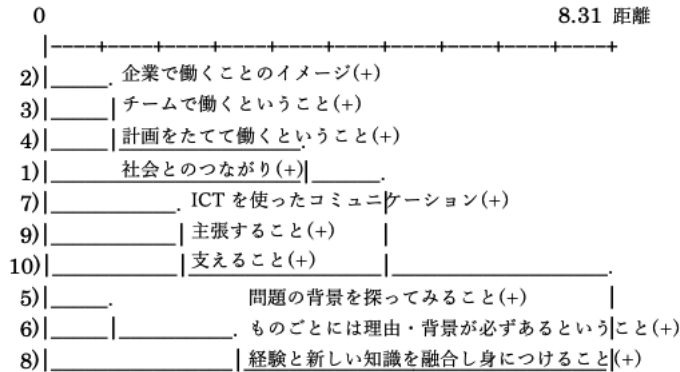


図1 調査協力者Aのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後の（ ）内の符号は単独でのイメージ

(1) 調査協力者Aによるクラスターの解釈：抜粋

(a) クラスター1は、「企業で働くことのイメージ」～「計画をたてて働くということ」の3項目：実社会で働くということがポイント。実際にプロジェクトを作ったりチームに入ったりするなかで、チームを作って働いていくということの重要さを学生の間に経験できる、学べると感じている。中心的な存在になった学生たちは頑張っていたけど、負担が偏っていて、周りの人もしっかりしてほしいなと思うこともあった。学生は、実際に一緒に活動する場面になるとみんないい顔で活動をする。一方、準備や裏でやってこななければいけないことは、中心メンバーしかやっていないということも見られる。責任感とか役割意識をどうやって芽生えさせたらいいのかなというところは、答えはなかなか出てこない。

学生によってはやるべきやらないときのムラみたいなのがある。それはコンスタントに今週は何をする、次の週には何ををするというように計画をたてて、それを誰がするのかということを確認することで、ある程度解決できるようになる。将来、どんな仕事をしていくかわからないけど、3年生ぐらいの間にアルバイト程度の役割ではないところで、少しでも疑似体験しておくことは大事。

(b) クラスター2は、「社会とのつながり」の1項目：これは、PBLが地域社会との関連があるということ。連携する相手は企業だけど、その企業は地域社会もなんとかしたいと考えている。企業もそうであるように、学生も地域や社会とつながるなかで問題を考える必要がある。そうでないと、活動になっていかない。例えば、社会でどういうリソースがあるとか。社会につながって生きているということが、この授業で感じられるのではないか。ダイレクトに地域の人に出会ったりするので。普段の生活だと年齢を超えて様々な人と出会うことはほとんどないと思うけど、

地域とか社会の課題を解決するなかで、年配の方とかあるいは逆に、地域に幼稚園があったら幼稚園児とか、いろいろな人と出会う。これから学生は社会にでていくけど、会社という組織だけじゃなくて地域や日本全体、世界のなかで自分もつながって生きていくし、その点を意識づけられるのかなあと感じる。

(c) クラスター3は、「ICTを使ったコミュニケーション」～「支えること」の3項目：これはコミュニケーションについて。チームワークのなかでコミュニケーションをとるときにICTが重要になる。また、自分の考えていることを主張することは大事になる。支えることというのは、主張する学生がいたとして、それに対する反応も大事であるということ。何がよくてどこを共感できたのかということを言葉で残していくことで、プロジェクトが進んでいく。お互いのことを考えたときに、きちんと反応して発言そのものに責任をもって動くことが大事。LINE等のプライベート空間でするのでなく、授業の中の公式のコミュニケーションを使うことで責任が生まれるし、役割意識も生じる。最初に躊躇していた学生もだんだんできるようになるし、それによって活動が動いていく。コミュニケーションの量とプロジェクトの進行はかなり比例する。ICTを活用することで、タイムラグはあるけど、普段授業ではしゃべらない子も主張したり反応したりできる。対面じゃない場面でコツコツと働いたり、伝えてくれたりすることもある。

(d) クラスター4は、「問題の背景を探ってみること」～「経験と新しい知識を融合し、身につけること」の3項目：パートナー企業からどうしてその課題を与えられたのか、その背景を探ることからはじめる必要がある。例えば地域の過疎化について考えるときに、学生は田舎にはいろんなことがないとかいうけど、どうしてそうなったのかを考える必要がある。これを作ればいい、あれをすればいいと言うけど、それがどうしてできていないのかを考えないといけない。これまでされてきたことをまとめないで新しい提案は出てこない。学生のアイデアがほしいと言われるのは事実だけど、ぱっと考えた思いつきがほしいわけじゃない。背景を知った上で、学生だから柔軟な考え方があるよねというところを期待されている。地域の方と同じ土俵に立つところまでいかないといけなくて、そこからの瞬発力や、そこからの柔軟性というところが学生に期待されている。

(2) クラスター間の比較：結果の考察や論考に関わる主要なもののみ掲載。

(a) クラスター1とクラスター2の比較

空間、フィールドが1の方は狭い。2は広い、包括的な概念。1は職業に関すること。2は職業だけでなく、人間が生活するときに一人でなく、社会で生きているという部分。それを意識したほうがよいということ。

(b) クラスター1とクラスター3の比較

働き方ということで、関連性がある。両方働くこと。そのなかで1は特にチームワークや計画

性に関すること。3はコミュニケーションに関すること。

(c) クラスター1とクラスター4の比較

1も4も働くということ。仕事をしましょうというときに、ゴールに向けてとにかく頑張って働くのが1としたら、4はそれまでのことをちゃんと知らしようという過程のこと、1を支える力のような部分。

(d) 全体について

働くキャリアデザイン的な要素が大きい。アルバイトと正社員として働くことの違いって何かということにつける。与えられた目の前の仕事だけしたらいいというわけでない。アルバイトでも何でこの時給がでてくるか、売り上げのなかでどれだけ人件費がでていってというようなことを考えるのが正社員の人たちの働きなので、そういうことのなかで、私たちは経済活動をやっている生きていっているよという、その中にみなさんは入っていくんだよねということ学ぶ機会なのかなと。

今やっているインターンシップではそこまで感じないのではないかと思う。1日とか2日で終わるインターンシップはただの見学。やっぱりプロジェクトを一つするだけでも、相当のことを考えると思うので、お金もついているし。かなりそういうものに近い。それを先取りして大学生の間に1回でも2回でも体験できるのは企業連携型PBLの最大の魅力である。

2. 調査協力者Aについての考察

はじめに、それぞれのクラスターの内容について吟味した後で、クラスター間の関係や全体的特徴について考察する。

(1) クラスター1：梅光型PBLのなかで、連携企業と関わりながら、実際にチームでプロジェクトの課題解決に向けて取り組むことで、「チームで働くということ」、「計画をたてて働くということ」を体験的に理解し、「企業で働くことのイメージ」をもつことができる。これらは、＜創造的な労働の擬似体験による勤労観の形成＞を示しているといえよう。

(2) クラスター2：地域社会とのつながりのある連携企業と、その企業の課題解決に向けて取り組むことは、連携企業だけでなく、地域社会や「社会とのつながり」を感じることにつながる。このクラスターは、＜社会の中で生きていることの意識化＞と命名することができよう。

(3) クラスター3：長期間、様々な場所で取り組みが行われる梅光型PBLでは、プロジェクトの推進にコミュニケーションをとることが欠かせない。課題解決のためにチームの中で一人一人が「主張すること」、またチームの仲間の主張に反応し「支えること」が重要になってくる。そのためには、対面のコミュニケーションだけでなく、「ICTを使ったコミュニケーション」の活用も有効である。そこでこのクラスターは、＜働くなかでのコミュニケーションの重要性＞と命名することができよう。

(4) クラスタ 4:PBLでは、表面的に問題をみるだけでは、課題解決には至らない。まずは「問題の背景を探ってみる」を行う中で「ものごとには理由・背景が必ずあるということ」を知り、そのうえで課題解決に取り組むことで、「経験と新しい知識を融合し身につけること」にながっていく。このクラスタは、＜課題解決のために必要な熟慮＞であるといえよう。

(5) 全体として：調査協力者Aは、学生が長期間、連携企業や社会と関わり、ときには実際に課題を体感しながらその解決に向けてプロジェクトに取り組むことで、チームで働くことや計画的に働くこと等企業で働くことのイメージをもつことができると捉えていた。また、それと同時に社会のつながりを感じながら生きるということを考えることにもつながると感じていた。その点は、通常の大学の授業や短期間のインターンシップでは得ることができない梅光型PBLの学びの効果であると言えよう。また、実際にチームで課題を解決していく際には、主張することやチームの仲間の主張を支えるなど、活発な議論や課題解決のための話し合い促進のためのコミュニケーションが重要となり、そこで、より実践的なコミュニケーション力がつけられると考えていた。さらに、大学におけるPBLということで、研究的な視点から問題の背景を探るとともに、PBLの特徴である実践のなかで経験したことで知識を融合することで、課題を解決するとともに、社会に出たり就職したりしたときに必要な実践力を身につけることができると捉えていた。実践知を身につけることが梅光型PBLの最大の効果と言えるだろう。

3. 調査協力者Bの結果

重要順位、クラスタ分析及び単独イメージの結果は、図2の通りであった。重要順位を1/3まで取り上げると、①自ら取り組む、②責任、③目的の大切さ、④大人と話すで、グループを活用するPBLの仕組みの中で学生が自律的に学習に取り組み、その成果を発信できるようになる点に効果を感じている。

(1) 調査協力者Bによるクラスタの解釈：抜粋

(a) クラスタ 1 は、「責任」～「グループの中で自分を活かす」の5項目：ゼミの中で具体的に取り組んでいることのまとめ。特に活動に焦点をあてたまとめ。ゼミという14,15人の集団で取り組んだので、協力することが学びの中で大切なこと。今の学生は仲良くしそうに見えてすぐにはできないところがある。表面上仲良くしているけど、もう一歩踏み込むことが難しい。変な平等主義がある。一生懸命したい人とそうでない人との差は必ずある。できない学生はそれでもできることをみつけていくことが大事。4月は全日程全員が参加するという計画をたてていたけど、毎日バイトに行かないといけない学生もいる。できることをやればいい。一人一人ができることをすればよい。何となくそういう気持ちがみんなわかってくる。できないときに、人を責めない。自分ができることをするのがグループで取り組むということ。だんだんわかっていくという感じ。後半はグループが安定する。平等にしなくていいんだ、できないんだということが

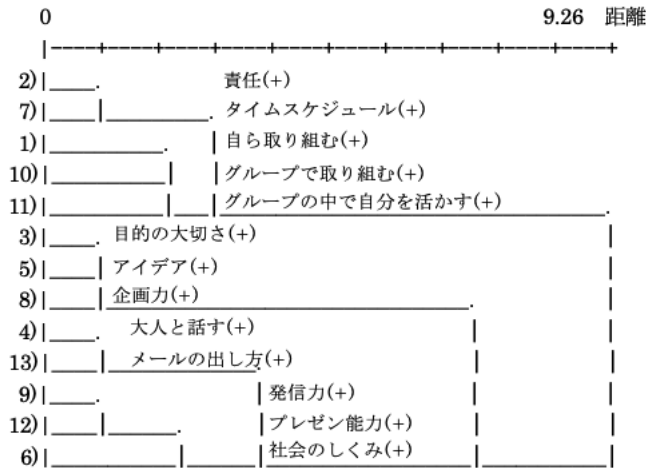


図2 調査協力者Bのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後の（ ）内の符号は単独でのイメージ

わかって。それと、責任、タイムスケジュール、個人で取り組む授業であれば、最悪徹夜すればなんとかなるという甘さがある。しかし、社会や学外の人と関わるPBLでは、徹夜しても何ともならないことがある。

(b) クラスター2は、「目的の大切さ」～「企画力」の3項目：今のゼミを選んで入ってきた人は、イベントをしたいと思って入ってくる。なぜそれをするのか、は考えていない。はじめにすぐやりたいことを言ってしまう。実現したい価値が何で、何故それをするのかを考えられない。どうしても、わかりやすいことに取り組みがち、わかりにくい部分を後回しにしてしまう。その前に考えないといけなことがある。本当に大事なことから考える必要がある。

考えただけでそれができると言ってしまう。頭の中と現実の距離感がない。まず小さく自分で実験してみる。考えるときは自由に考えたらいけど、そのへんのバランスは繰り返すうちにだいたいよくなっていく感じがする。はじめは0か100の思考で、これはできませんとかすぐ言ってしまう。落とし所、そういうところを考えなければいけないのだと。

(c) クラスター3は、「大人と話す」～「メールの出し方」の3項目：PBLは、いろいろな大人と関わる機会、良質な大人と関わる機会である。学生が今週の授業で行ったこと等をメールで報告する、先方さんも丁寧にお返事をくれるなかで関わりながら、進められている。バイト先で大人と関わる機会も学生にはある。しかし、いろんなバイトがあるけど、よくない大人にも出会ったりする。そうではなくて、オーソドックスな働き方をしている方にきちんと説明したり、話したりする機会は貴重。お願いしたり説明したりすることはとても大事。学生の成長のために、良

い大人と関わることはとても大事だと思う。学生の論理で世の中は動いていないということに気づくようになる。

(d) クラスター4は、「発信力」～「社会のしくみ」の3項目：説明したり、誰かに伝えたりするのがこのまとめ。アウトプットはイベントだったので、そうなると発信して、届いたかどうかが重要になる。学生は、はじめは告知をすると人が勝手に集まって来ると思っている。伝える時に、どこにだれにチラシを配るのか、届けたい方に届いたかどうかを考えることが大事。周りの人に協力してもらうためには、自分たちの思いをプレゼンして伝えないとだれも協力してくれない。つながっていくということと、お金を払ってやってもらう関係とは違う。ちゃんと一緒にやりましょうとお願いして、それでは協力しましょうと言ってもらえる関係、一緒に負担してくださいという関係。思いを伝えるのは大事。ちゃんとプレゼンしてくること、そのプレゼンの緊張感、やっぱり大学でするのは違う。PBLの実践では何を明確にしないといけないか、本当に伝えないといけないという覚悟がうまれる。ちゃんと伝わったら、みんな協力してくれるということ、ちゃんと手伝ってもらえるということがわかる。

(2) クラスター間の比較

(a) クラスター1とクラスター2の比較

1,2はともに普段の活動だけど、1は具体的に体を動かして実際にやっていること、動くこと、汗を流すこと、2はどちらかというと、一生懸命考えるフェーズ、1の前段階、話をしながら動き出す前の段階のこと。

(b) クラスター1とクラスター3,4の比較

1は教室の中でやっていること、学生同士でやっていること。3,4は外部の人としていること。対外の関係。

(c) クラスター2とクラスター3の比較

2は考えるフェーズのこと、3は考えたことを外部に伝えること。考えることと、外に向かって伝えていくこと。

(d) クラスター3とクラスター4の比較

どちらも伝えるということだけど、3は関係のある人とのコミュニケーション、すでに関係があってそのなかでの伝え方、4はどちらかというと、まだ関係がないけど、未知の人に伝えていくこと。

(e) 全体について

一人ではできないことを学んでいる、社会は自分だけで動いているのではなく、みんなで動いている。そういうことを学んでいくものだということ。

4. 調査協力者Bについての考察

(1) クラスター1：梅光型PBLは、10人以上の集団でゼミとして1年をかけて取り組んでいた。そのように長い期間で課題解決に向けて「グループで取り組む」なかで、「グループの中で自分を活かす」ために、連携パートナー企業を意識して自分の行動や役割に「責任」をもち、しっかりと「タイムスケジュール」をたてて、できることに「自ら取り組む」ことが求められる。これらは、＜協働的なグループ形成とグループ活動への参画＞を示しているといえよう。

(2) クラスター2：PBLでは結果が求められるが、安易に何か制作物を作成したり、行事を計画したりするのでなく、目的をしっかりと定めて、様々な「アイデア」を考えたくてアプローチをすることが重要となる。そのなかで、「目的の大切さ」に気づいたり、「企画力」を育んだりすることができる。このクラスターは、＜目標志向的かつ計画的な活動＞と命名することができよう。

(3) クラスター3：梅光型PBLでは、課題解決のために連携パートナー企業先の「大人と話す」場面やビジネスマナーに則った「メールの出し方」をもとにメールで連絡をする場面が多くある。そこで、学生は社会人としてのマナーを学ぶとともに、様々なビジネスパーソンや社会人と出会い関係を構築していく。また、それがPBLの学びや効果そのものとなる。そこでこのクラスターは、＜良質な大人との出会いと関係構築＞と命名することができよう。

(4) クラスター4：PBLでは、課題解決に向けて説明したり発信したりする場面が多くある。そのような機会に失敗も含めて様々な経験をしながら、その経験の意味を考えたり、改善したりするためにどうしたらいいか考えるなかで、「発信力」や「プレゼン能力」が育まれていく。また、責任をもって説明をすることで、協力や援助を得ることができるというように、「社会のしくみ」を学ぶ機会にもなる。このクラスターは、＜課題解決のために必要な伝える力＞であるといえよう。

(5) 全体として：調査協力者Bは、梅光型PBLの効果として大きく2つのことを感じていた。1つは、グループの中で個人個人が見通しや責任をもって、主体的に活動に取り組む力が育まれることである。そして、もう一つは、パートナー企業を含む様々な組織や人から協力を得たり支援を得たりするために伝える力を高めること、その過程において多くの大人と関わること、さらに、課題解決のために目標志向や計画性を身につけていくことである。目標をきちんと定め、アイデアを出し合い、連携企業と連絡し合い、考えたことを発信していくというように、企業と連携したPBLの学習過程のなかで様々な力が必要となる活動場面があるため、そこに向かって丁寧に活動を進めることで、就職した際や社会に出たときに必要となる力を学びのなかでつけることが身につけることができると言えるだろう。

IV 総合的考察

本研究では、本学で導入されている梅光型PBLが受講学生にどのような効果を及ぼしているのかについて、教員の視点から検討することが目的であった。調査協力者の連想項目や語り、それらのクラスターから、以下のようなことが示された。

梅光型PBLでは、3年生全員が必修単位取得のために授業プログラムに参加する。また、一つの連携パートナー企業、一人の担当教員のもとに15名程度の学生が集う。そこでは普段関わりのない、あるいは少ない学生とも課題解決に向けて協働的に取り組むことが求められる。そのため、必然的にチームワークが必要となり、1年間という長期間のプロジェクトに参加するなかで自然に協働的課題解決能力が身につけられると言える。これは梅光型PBLの大きな成果と言えるだろう。

一方、学びの目的が学生の主体的な学び、自律的な課題解決であるため、教員は何らかの問題を認識したとしても必要以上にリードせずに、自分自身の問題やチームの問題に気づき解決できるように支援することになる。そのため、協働的なグループ形成とグループ活動への参画に際して学生は試行錯誤し、迷ったり悩んだり、学生同士で衝突したりする。そのような紆余曲折自体が貴重な経験であると最後には言えるのだが、学習途中においては一義的なマインドセットをもつ学生やうまくいかないチームにとっては相当の負荷がかかると言えるだろう。違う見方をすると、学生の主体的な学びの成立のために、担当教員には必要最低限かつ適切な支援が求められるため、かなり高度な授業展開スキルと学生やチームの状態のアセスメント能力が求められる。これらの授業スキル等の担当教員間の共有は、今後梅光型PBLを継続していくうえで欠かせないと言えるだろう。

協働的課題解決能力とともに、2名の調査協力者が効果として感じていたことが、協働的課題解決能力の礎となるコミュニケーションやプレゼンテーション等の伝える力の向上である。これらの力は、一般的なPBLにおいてもその効果が認められる。しかし、梅光型のPBLでは、学生同士で話し合うだけでなく、連携パートナー企業やその企業に関係する地域や人々と長期間にわたって関係を構築しながら課題を解決するため、直接的に話し合う、報告する、説明するといった場面が多くある。そのため、一般的なPBL以上に学生が切実感をもって課題に取り組むこととなり、その過程においてこれも必然的に伝える力が高まっていくということが考えられる。

一方、この伝える力の向上にも課題はある。もともと学生がもっている力やそれに影響するパーソナリティにも大きな個人差が認められる。また、調査協力者Bが述べていたように、人間関係の構築が得意でない学生も多く見られる。そのため、課題解決に向けた取り組みが進み始めると、学生自らコミュニケーションを取り合い、それらの力をより高めていくことになるが、そこに至るまでは教員がコミュニケーションがうまれるしかけをつくったり、主体性を損なわないように

配慮しながら関係作りができるような指導支援に積極的に取り組んだりしていく必要があるだろう。

調査協力者A,Bが協働的課題解決能力、伝える力の向上とともに梅光型PBLの大きな効果、あるいはそれらの力を育む要因と捉えていたことは、社会や企業、地域や大人との出会い、そして社会そのものを学ぶことができるというものであった。1,2年後には社会人としての自立が求められる3年生学生であるが、大学の授業はなかなか社会を直接的に感じることができるものはない。そのような学生にとって、実際に活動している企業や地域、大人や社会に触れることは、かけがえない経験となるであろう。この部分があるからこそ、伝える力や協働的課題解決能力を向上させる必然性も生まれてくるし、PBLの学びがいややりがいい、学生にとって学ぶ楽しさも生まれてくると言えるのではないだろうか。そして、このような仕組みのある梅光型PBLは、調査協力者Aが述べていたように、学生が主体的にキャリアを形成していくうえで重要な機会となるだろう。

最後に本研究の課題について述べる。本研究の調査協力者は、教員2名であった。その評価の視点には、それぞれの教員の指導観や学習観、学生観が反映されていることが考えられる。そのため、今後はより多くの教員の評価を用いて多角的な視点で、梅光型PBLの効果、成果と課題を検討する必要があるだろう。

また、学習効果を検討するためには、教員の視点だけでは不十分である。教員の視点だけでなく、学生の視点も活用して総合的に検討していくことが今後の課題となるだろう。

引用文献

梅光学院大学「オール・アクティブラーニング宣言」

(<https://www.baiko.ac.jp/university/juken/activelearning/> 2023年12月25日確認)

福屋利信(2020)『大学教授よ、書を捨てよ、街へ出よう～「プロジェクト型課題解決学習」(PBL)進化論』、太陽出版。

文部科学省(2013)「平成23年度の大学における教育内容等の改革状況について」。

文部科学省(2023)「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について」。

内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待(改訂版)』ナカニシヤ出版

山口県(2018)「平成30年度当初予算の概要「3つの維新」への挑戦」

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/18467.pdf> 2023年12月25日確認)

山口大学(2014)「国際総合科学部国際総合科学科 設置の趣旨等を記載した書類」

(https://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kikakuka/settikankei/h27/kokusaisougoukagakubu/h27_kokusaisougoukagakka_settuchinosyushi.pdf 2023年12月25日確認)

山口泰史(2017)「我が国におけるPBL研究の動向－大学教育での実践を中心に」『日本地域政策研究』19,34-41.

梅光学院大学論集規程

(目的と名称)

第1条 梅光学院大学における学術研究の成果を発表するために、紀要を定期的に電子媒体で公開する。

2 この学術雑誌を、梅光学院大学論集 [BULLETIN of BAIKO GAKUIN UNIVERSITY] (以下、論集という) とする。

(論集編集委員会)

第2条 論集編集に当たって編集委員会を置く。

2 編集委員会の構成メンバー及び責任者は学長が任命する。

3 編集委員会は以下のことを行う。

- ① 論文等投稿の呼びかけ
- ② 論集投稿者への連絡
- ③ 査読者の提案
- ④ 印刷会社との折衝
- ⑤ その他論集公開に当たり必要なこと

(論文投稿資格)

第3条 論集に論文等を投稿できるのは、梅光学院大学専任教員、客員教授、非常勤講師、客員研究員、その他学長が認めたもの。

2 共同研究の場合は、本学専任教員が含まれるものとする。

第4条 投稿原稿の種類は、次の各号のとおりとする。

- ① 論文
- ② 研究ノート
- ③ 資料紹介
- ④ そのほか編集委員会が認めたもの

(原稿の分量及び様式)

第5条 原稿の字数は、原則として邦文で 12,000 字以内とする。英文は先に準ずる紙幅以内とする。邦文の場合は、英文題目を付する。

2 論文等には、邦文の場合で約 200 字の要旨を付する。その他の言語の場合は、左記に準ずる。論文等には 3 語から 5 語のキーワードを付する。

3 定められた定型の様式を用いること。

(公開時期及び提出手続)

第6条 論集は、毎年度 1 回 3 月末日付で公開する。

2 原稿募集期限は毎年 12 月 1 日とする。

3 投稿の意思があることを、論集編集委員会に事前に伝える。

4 原稿は、メール添付で論集編集委員会に提出する。

(論文等の審査)

第7条 投稿論文等は学長が決定した査読者が査読を行う。

2 論文等の採否は、査読者からの報告を受けて学長が決定する。

(著作権)

第8条 公開された論文の著作権は著者に帰属するものとする。

(電子化の許諾)

第9条 論文を電子化して公開する権利は論集編集委員会が有する。

2 投稿者は論集編集委員会に対して、当該論文等の印刷、電子的記録媒体への変換・複製、学内外への配布を許諾するものとする。

3 投稿者は論集編集委員会に対して、当該論文等の送信可能化・コンピュータネットワーク等での学内外への公開を許諾するものとする。

(所管)

第10条 この規程は、大学事務局において管理する。

(規程の改廃)

第11条 この規程の改廃は、大学運営会議の議を経て学長が決する。

附 則

この規程は、2021年（令和3年）10月1日から施行する。

執筆者紹介

赤 堀 方 哉（あかほり まさや）	子ども学部教授
入 江 香都子（いりえ かつこ）	文学部講師
真 田 穰 人（さなだ しげと）	兵庫教育大学大学院 学校教育研究科講師
宋 弘 揚（そう こうよう）	文学部講師
董 航（とう こう）	文学部講師
馬 場 洸 志（ばば たけし）	文学部講師

（50 音順）

論集編集委員

樋口紀子	木弘	徹揚
宋董		航
杜		岩
劉		杰
内山	乃一	聡一朗

梅光学院大学 論集第57号

2024年3月31日印刷

2024年3月31日発行

〒750-8511 下関市向洋町1-1-1

発行者

梅光学院大学

樋口紀子

印刷 〒752-0927 山口県下関市長府扇町9番50号

瞬報社写真印刷(株)

BULLETIN

of
BAIKO GAKUIN UNIVERSITY
57

-
- ‘Fate’ and ‘Accident’ in SHIGA Naoya’s *Kinosaki nite*
—focusing on the meaning of quoting Macaulay’s *Lord Clive*— Irie Katsuko [1]
- A Study on the Enlightenment of Fujii Ransai and Nakamura Tekisai
—Focused on Their Efforts in Women’s Indoctrination— Dong Hang [13]
- A Study of Young People’s Intention
to Find Local Employment Song Hongyang [25]
- Study of Visualizing Relationship Building
with Community Partner in Service-Learning Takeshi Baba [37]
- Effects of Baiko-type Project-Based Learning on students
—From an interview survey with teachers— Shigeto Sanada
Masaya Akahori [53]
-